

J2.99:14

14 of 20

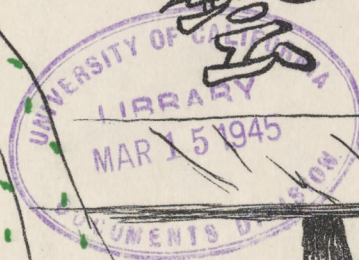
Mar. 1945

Vol. 3, no. 3

67/14  
C



# ポスト 文 藝



三月  
号  
八  
大  
文  
藝



ポストン文藝参月拜目次

表紙

門脇仁

卷頭言

1

丹下左膳

翠川敏

3

けむり

外川明

9

浅春冥想

大池智恵子

12

愛について

千世

16

労働心理

矢形溪山

18

生活メモ

とき子

22

ポストン生活印象

貴家志ま子

26

春・吐息愁

芙紗子

2

影断章

牧さゆり

30

信子の誕辰夜

片井溪富子

32

ポストン小唄

マツイ・シユウスイ

34

冬枯れのランドスケープ

山田如骨

35

何處へ行く

山中稔

36

俳句二人抄

木内春波

37

満座那吟社

吉里・関

38

短歌

睦月歌會詠草集  
選後随録

永瀬勇

42

柳川

古川柳句解  
句會並互選

島原潮風

53

創作

老人とそれに私

林元幸盛

62

彼の死

真澄丘

69

ながれ

芙紗子

73

森

谷川江浦草

83

佐渡甚三郎

芳川積三

91

編輯後記

100

カッ  
板

進藤舟才  
瀧井謹平



## 卷 頭 言

或る日のこと、横濱の豪商平沼氏が山岡鉄舟を訪へて、一場の回顧談をこゝろみたことがあつた。

「世の中は実に妙なものでございます。はじめ商賣をしてをりまして、これはキツト儲るなと思ひますと胸がドキつき、損をしやうないか知ろんと思ひますとそれだけでもう身も縮る思ひがいたしまして、その結果も余り宜しくございませんでした。それで、心が割合と平靜なときに大体のそくろみをたて、おきまして、愈々事業に着手いたしましたなう今度はその是非損得は一切因はれず唯はじめのそくろみ通りドシ／＼事を追めて行くことにしました。するとどうでせう、心を徒らに勞することもない上に商賣も亦トシ／＼拍子に行くでございませんか。ハ、ア、之が商法のコツだなアとその時はじめて悟りましたが、私が今日の産を致しましたのもたゞこの呼吸を会得したお陰に他ありません。ジツト之に耳を傾けてゐた鉄舟は思はず膝を叩いて、生死関頭に立つて迷はず」とはソコだなアと感嘆之を久しくしたと言ふことである。

名人達士が此境地に達するには又長年月の時間と百千鍊磨を経た後のことであらう。併乍ら吾々の生活が、昨今の如く余りに多くの雑音に悩まされる時、かうした達人の境地が平凡人日平凡人なりに慕はれてならないのである。T.I



暖かい陽光がふつてゐる砂丘にわすべつて  
目をつむると土の中から春の足音がきこえてくる

そして私はあの山峡の故郷を思い出す

若むいた庭石の間から此の冬も水仙は花をつけたであらうか

あの白壁の蔵の横の梅の古木に今年も鶯はきて啼いたで

春  
あらうか

愁  
あの蹄涙の咲く堤に坐つて見た人生は

深く蒼い空のやうであつた

清く美しく智識の香気に充ちてゐた

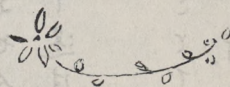
故郷の友よ！兄弟よ！

貴方達が熱い信念に生命を捧げてゐる時に

私はわくも意思も生きてゆかなければなりません

右の頬をつたつて流れた湯のやうな涙が砂にしみ入る音をきく！

笑 紗 子







母下左膳に寂しい

勘須磨師匠の音頭を観て



翠川 敏

今宵 片割れ 名残りの月に

丹下左膳の影法師

花の江戸とは 名のみの寒さ

更けて 血に哭く 「濡燕」

誰が させたか おいらのせいかな

片目片腕 佗び住ひ

芽ぐむ青柳 水さへぬるむ

春よ 昔の物語り



の低い音調が、四邊の静寂を破つて身に沁みる。遙か遠方の山から響いてくる木霊のやうな旋律に頂垂れて耳を澄ましてゐた。

正月も半ば過ぎ、こゝとしては稀らしくも沈まつた夜。ポストンの藤間ステュディオには、勘須磨師匠の他の人の氣配すらも窺われなかつた。

夜の更け行くのも忘れ「もう一回どうぞー」を幾度となく繰返した。其の度毎、師匠は黙つて針を変へてくれた。

果ては目の前に「丹下左膳」がゐるかのやう意識され、暫し容易くは面を上げることは出来なかつた。カットンボールの舞臺に浮んだ、眞白な幻影が、またもや散らつきさうなので

x

x

勘須磨師匠は、正月芝居の幕合に、第四舞臺では「丹下左膳」と「勝鬨」を踊つた。第二と第三の舞臺では、其の他に「眞實節」と「二上り新内」をも踊つて呉れた。第一で二日目に踊らなかつたのは、幕間の都合がつかかなかつた爲であつたさうな。舞臺監督から幕内主任の仕事までも一人で勤めなければならぬ師匠としては、無理もなかつたであらう。

「丹下左膳」と「眞實節」を見せたのは、自作を發表した形。アンコールに出した「二上り新内」に「勝鬨」は、家元から授かつた物。云ふが、両方とも素晴らしい舞踊であつた。若し衣裳を更へて踊つたのならば、もつと



受けたに相違ない。

技巧の上から見て「眞實節」では 傾城高尾が主要の三段返し「二上り新内」では 螢追ふ暇なかりけりの思入れよろしく 團扇微風を誘つて顔を粧ふ邊りが 最も見榮えさせるアングルであつたやうだ。「勝関」は難かしい舞踊であると思ふ。勘須磨さんのやうに 余程バランスの取れる踊手でもなければ 振リ一呼吸の差でカツボレと化して了ふからだ。ケークウオークを巧に碎す世界的なバレリナでも ダンシユウスでも あゝも輕快な宙に浮ぶ足を見せられたとしたならば 恐らく跣足でダーを決めることであらう。

文句のあらう筈がなく 觀衆にはどれも大いに受けた。併し 私に最も深い印象を刻みつけたのは「丹下左膳」であつた。師匠の氣分に一番ピッタリと當嵌まつた舞踊だと感受したので——けれど「丹下左膳」は余りにも寂しい。

第四舞臺では素で踊つたが「丹下左膳」は衣裳を附け メイクアップして出す物と見られ 勿体ないばかりに済まなかつた。何とかアレンジして貰ひ度いと思つてゐた所へ 幸にも師匠の棄氣で 第二と第三の舞臺に出す折には「出来るだけ工夫を凝らしますから——」の吉報が入つたので 差出がましくも照明を手傳わせて頂くことにした。

土手の小道具 柳の裝置で場面を河端に仕替へたのは ポストンとして精一杯の努力—— 照明なしの舞臺—— 闇の中に幕は引かれて行つた。



岸の柳に 背を凭れ 蹲る左膳は 深く河原へ視線を流す。こゝで 照明子

K君と相談して 揚幕の上にある照明臺から 青いスポットを投げてみた。

廳で 黒頭中の左膳は 徐ら立上り 土手を下りやうとする。白の衣裳であ

り 如何にしても 足下に凄惨な氣分を漂わさなければならぬ場合だが 残念

ながら三原色さへも揃へてない仕掛けである。素足に草履ならざる出立ちでも

あつたので 思切つて膝の邊をホーカスに白に変へ「泣くな」……片目

片腕を……親の仇を討つまでは……で正面に極つた時から 絞りを解い

て舞臺一面に擴げ「濡燕」を抜く一刹那 青へ戻したのだが 惜しいことには

スチールを混色られない為 左膳の左面が蔭となつた。

舞踊「丹下左膳」には 一貫して「虐げられた者が更に強く世に勝たうとし

て呻く」旋律が流されて居り「濡燕」のみが解決して呉れるやうに作られてあ

る。抜けは切る。切るに如かずだが 流石勘須磨さんだ舞踊を通じ一度抜き幕

になつても 鞘に収めさせてゐない。

これは餘談 新國劇の黨主であつた澤田正二郎が 未だ關西へ落ち延び

てゐた頃であつた。どうしても劍の凄味を出すことが出来ず困つたものらしく

つた。後年 東京に返咲き日本の澤正となつたまでの蔭には「劍の凄味」を會

得した苦心が秘められてゐる。劍道有段者と云ふ書生氣質 脱して吉右衛門に

師事し「舞臺では劍を抜く直前に演技の頂点がある」骨を悟 させたからであ



つたのだ。

事實 劍が抜かれて了へば 見物は氣を弛めるのである。だから 是が非でも抜く瞬間に切つて置かなければならないのだ。三の舞臺に於ける「左膳」は確かにズバリと抜いた直前に切つてゐたと 私は固く信じてゐる。

第二（カットンボール）の花道は 舞臺に二十度位の角度で造られてある爲照明臺からのスポットは 場面一杯に効かないことが判明した。脚光をつけることも考へられたが 師匠は矢張りスポットだけで演くと云われたので 相談の揚句 スポットに向ふて「濡燕」を抜いて貰ふこととした。所が 照明臺へ登つて見て吃驚したのである。装置が遙か前の方に延ばしてあつたので

時既に晚し。これは大変なことになった。切つて呉れ、ば可いが 下手を間誤ついたら 斬られて了ふかも知れない

「左膳」は構へた。「斬るか」の囁きが「濡燕」の鯉口に掛けられ

た時には 私は夢中……抜かれた一刹那「ウーン」と唸つて了つた。何故ならば「左膳」は左手 スポットは右手へ投げられるので 劍を背後に浴せなければならぬ型となつた。其れが爲め抜打てず 大上段で下し トン／＼を踏んで極まつたから—— 私は あの夜 あのステツプの合間に斬られた「白い左膳の幻影」に 折に觸れて見舞われることがある。

丹下左膳は 徳川幕末の頃 當時の作家に依つてデッサン上げられた架空的な



存在で 實在の人物ではないと云ふ。

林不忘の「丹下左膳」は 其れから取<sup>シ</sup>枝を採り 徳川三代將軍家光の時代を背景として物された作品。同氏他界后 川口松太郎氏が受継いで筆を執つてゐると聞く。何はともあれ 片目片腕に仕込まれた寂しい作意が奈邊<sup>ナヘ</sup>にあつたかを今は知る由もない。また 茲では詮索<sup>センサク</sup>の必要もない。取扱われてゐる時代執筆された頃の世の思潮<sup>シキョウ</sup>とを参照して 其れを検討しやうとする試みも 本篇とは無關係なのである。要は「丹下左膳」は寂しい——。これが藤間勘須磨の直觀した考察<sup>サツ</sup>であり また 舞踊を作つた契機<sup>モチヰ</sup>ともなつたものらしい。この舞踊は人間の寂しさを暗示する舞踊でもある。其れは 寂しさを表現したばかりでは解決されない。何故 寂しいかを感受せしめる努力が この舞踊の生命となつてゐるやうである。

x

x

別れを告げる時「森の石松は多勢のお弟子さんにお教へしましたの けれど丹下左膳はね……」。師匠の面に一抹の寂しさが流れるのを見逃せなかつた。其の寂しさの中に 曾て 舞踊のゴツデスとも稱された イサドラ・ダンカン<sup>II</sup> フォキイナ<sup>II</sup> パヴロバ<sup>II</sup> から受けた印象と似通つた何物かがあるのを感じた。外に出れば漆黒<sup>シツコウ</sup>の丑満<sup>ウシマン</sup>。闇<sup>ヤミ</sup>を越え彼方<sup>カナタ</sup>に第四舞臺のミイラー<sup>II</sup> デが反<sup>サシ</sup>く。不圖「藝術は寂しさの内から……」が唇頭<sup>シツ</sup>に浮ぶ——。





随想

# けむり

外川 明

「キャンプは冷たい雨、山は雪、その昨日の雨が霽れた今朝は霜々々々々。バラツクの屋根も路に敷き並べた板の上も雪の如くに真白な霜です。」

友人への手紙にかう書き出して、その次の言葉を考へながら、ふと南側の窓に瞳を遣れば、雨に淨められた壁焼場の黒い土から、白い煙がむく／＼と這上つて青空へ昇つてゆく。寒さにちぢかんでゐた私は、急に胸の中に和らかな温いものを注ぎ込まれたやうな氣がして、少時その煙に見とれてゐた。

私は煤煙の多い都會に生活してゐる間は、大して煙といふものに愛着も持たなかつたが、この沙漠の中に移されて以来、人間の生活の旗印である煙といふものの親しみと懐しさを沁々と感じてゐる。私達が移つて来るまでは、ひとすぢの煙さへ立たなかつただらう荒寥たる沙漠を想へば、煙も一入懐しいではないか。そして、何れの日にかこの收容所も閉鎖されて、その跡には全く煙を見ることが出来なくなるであらうなび／＼想へば、各部落の食堂の三本宛の煙突から立昇る。凡そ美しくない黒い煙にさへ新しく執着心が湧いて来る。

此處からツールレーキへ移つた山田如骨さんが、ポストンの思出に、炭焼きの煙を都々逸に作つて送つて来たのを一寸見せて貰つたが、炭を焼く煙は、煙



の中でも最も美しいやうに思ふ。紫色の巖山を背景にして、鶉<sup>ウツラ</sup>色のメスキッド林の中から、一すぢニすぢ立ちのぼる、青みを帯びた白い煙の美しさは、何時までもく山田さんの脳裏に残つて居ることであらう。あの頃は病院のすぐ裏のあたりから、幾すぢも炭焼きの煙を観ることが出来たが、今年は炭を焼く人々も次第々々に奥へくど這入つて行つて、すぐ部落の近い所には煙を見ることが出来なくなつて、何となく寂しく感じるのである。

炭焼きの煙のことを云へば、裏富士高原の樹海と云はれてゐる青木ヶ原に立昇る炭焼きの煙も美しく懐しい思出である。その煙をはるか遠い西南方に眺めながら、自在鍵の下つてゐる圍爐裏に、朝な夕な飯焚く煙をくすぶらせてゐる故里、廿数年前に別れたまゝの母のわびしい姿までが頭に浮んで来る。

家ごと青空を少しけむらして正月元旦。

大月 喜三郎

恙なく今年も暮るゝどの煙出しからも煙。

米倉 久 枝

ユタ州のトパスセンターから届いたポピイ吟社の新年句抄の原稿の中に右の二つの煙の句を見出して、得も云へぬ親しさを感じさせられた。更に、アーカインサスのローアーセンターから送つて頂いたデルタ吟社の句集に眼を通せば、

朝はあたゝかくバラツクの煙真直な元日。

徳永 田谷子

お向ひ子持ち歌聲や笑聲やチムニ煙が昇る。

藤田 藤女

汽車の煙白黒ちぎれくにとぶ冬の朝。

山 北機堂



窓の陽背に暖かし一本の煙草の煙。

小室 鏡太郎

等、幾人もの煙癮讀者を見出して微笑ましくも懐しくなつて来たのである。それもこれもみんな寒い時の煙の懐しさを歌つたものであるが、暑い夏の夕のけむりを和歌に詠んだ人に久留島芙沙予さんがある。

『この轉住所<sup>まぢ</sup>もうつくしとみぬ月明く蚊やりの煙こむる夕は。』

まことにホストンの初夏の頃の蚊遣りの煙は異つた思出深い情景であつた。

私の住んでゐる部落のすぐ南の方には火葬場があつて、時々褐色の煙が立つことがあり、その都度私は一茶が愛児を失つた時の歌を思出す。

『おもひきや下詣いそく若草を野邊のけふりになして見んとは。』

「ひとだまが出るさうだ」そんな噂もひろがる火葬場であり、氣持のよくな  
いその煙ではあるが、その火葬場の煙の寂しさの中にも、何か味ふべき深い  
ものがあると思ひながら眺める私である。然しその煙の立つ場所のもつと向ふ  
には終日豆腐屋の煙が見えるので、色こそ美しくはないが、これこそほんとう  
に懐しい煙である。不斷に立昇つてゐてくれればよい煙である。

煙 煙 けむり 私の心を和ませるけむり 私の心を落着せるけむり と美  
しい煙のみにペンを運んで来たが、所えない私のペンでは到底描寫することの  
出来ない凄愴な煙で蔽はれてゐる海を想ひ、陸を偲ぶ時、身が引締るやうな感  
じがする。

(一九四五一年一月二十七日)



# 浅春冥想

大池智恵子



それは一月も半<sup>ナカ</sup>を過ぎた或る日。

雨上りの風もない午<sup>ヒル</sup>さがり、浅春のやはらかひ陽ざしを浴びつゝ、キャン<sup>ン</sup>プ通ひのバスに揺られながら、視るともなく瞳に映る三年近く毎日見馴れたる山々が目路の限り、数日来降り続いた長雨に、すっかり洗ひ洗はれた山肌から、裾野まで、くつきりと鮮<sup>アザヤカ</sup>に浮み上った様で何とも言へぬ新鮮な美しさである。

此處ホストンは春立に早く、裸木となつて枯木立の様に見える。雑木林もバラツクの周圍に植られた樹々の枝にも、思ひ<sup>ナ</sup>做しか幽かに新芽のふくらみを見せて、路傍のうら粘れた<sup>シロ</sup>藨草の下から見える浅みどりの草にも、春の息吹きを感じさせられる。舗道に添つた養豚場の向ふに續く青々とした廣い草原の、まだ雨上りの間もないので、露にも濡れてゐさうな草の中で牛が悠<sup>ユ</sup>々草を食んでゐる、茶と白や黒と白との斑<sup>マダラ</sup>点の牛が何匹もひとかまりに、



並んでその背には、晴れるともまだ降るとも、はつきり染るゝ雲の動きを通して春の陽が、いつぱいに照り映へて、こながら一幅の名畫の様な感じをも、柵越しに視て、その美しい繪の中を通つてゐる様な錯覺さえ起りさうな、一瞬を味ふ事が出来たのは思ひ儲けぬ嬉しさであつた。少し離れた草叢クサムラや陽溜りヒメの彼方此方に、ブタ君の群も見えて何と云ふ静かな春のひと時であらう。

雨後の畑のところ／＼には、ツラクターが使ふ人もなく、置かれた儘に待機した形で陽なたぼつこしてゐるを見て、ふと戦車を想ひ兵に征きし子の顔が、臉に浮んで来る。この静かな早春の日にも戦ひは進められて、澤山の尊い人柱が斃れてゐる事であらう。青雲の志望に燃る若い人達の上にも亦、自分等の行く手にも、かうした宿命が約束づけられて居るとも知らず、只ひたすらに、すく／＼と成人して行く、子供達の生ひ立ちを何にも代へて悦び育て、漸く築き上げられた一世の事業の後継者として又、二世、三世の自らそれ／＼の天分の豊さをその角度から伸ばして行く秋に當り、老ひ行く親も愛する總てのものを後にして征く青年達の苦しい立場にある心境を想へば胸の痛くなるのを覺へる。

戦線に或は外部へ出して、寂しいながら今は諦めに似た倦びし



さはありながら静かに老ひを養ひ、ひたぶる平和の日を待つ人の上にも、加州歸還、轉住所閉鎖の聲にまたしくも、多少の人心の動搖は各セクターからの代表者會議が、ソートレーキで開かれる。とて、各ブラツクミーンテングの夜は更ける。

沙漠の生活も三年、住めば何とやら轉住所の不自由勝ちな、氣苦勞の多い、集團生活の不滿な人は、ほとんど外部に出で、今残つてゐる人達は満足せぬ迄も不自然な生活の内に自ら慰めて、いつか馴れ切つた生活も板につき、平和の鐘の鳴るまでの我家として落ち着きさへ見え、むしろ同じ所に同じ事を繰り返す明暮れの日常は倦怠期に入つた様にも見受けられる此頃ではあるが、さて何處へ行けと云ふのか？。

生活の安定もつかず、教育盛りの多くの子女を連れて想ひ惱む親の姿、自分はどうなつても子供文はと、捨身の親心こそ、本當に尊いものに感ぜられる。この親心こそ歴史が繰り返す尊い親の心であり、民族の續く限り享け継がれる尊い親の心である。平和な世界建設の爲の戦ひではあるが数知れぬ多くの人命や、物資を失つても尚續けられてゐる此戦ひの一日も早く……皆と共に祈らずには居られない。



今年の内には大方異つた形に展開されて行くであらうが健やかな體と、確固たる信念を持ち續けたいものである。取り止めもなく次々と想ひに耽るまに自動車は、いつか目的の所に着けられてゐて、風もない空に白い鳥が飛んで行く、翼いつぱいに春の陽が輝いて美しい。

水泳場のプールに湛へられた水も綺麗に澄んでゐるのを視ても、もうちつとも寒さを感じないのは、やつぱり春の水といふのであらう。

征くまへの暇惜しみて母われに

一目を欲りて子は戻り来ぬ。

誰も征き誰は斃ると聞くからに

此の戦ひのいよゝ身近し。

男の子ふたり二人ながらもい征くてふ

時<sup>トキヨ</sup>世なりせば術なかりけり。



# 愛について

千 世

静かな静かな空氣が足許からだん／＼に押し込めて来て、やがて私の體全體を重たく沈めて了つた。

繁雜な一日からやつと解放された私は、今度は心の中にヒタ／＼と波の如くに打ち寄せて来る感情の捕虜になつて行く。

雨が降つてゐる……人の足音もない。私の思索は今や自由の羽を擴げて無限の世界に遊飛して行く。

私の感情の一つが斯う言つてゐる。

「お前は愛する事と愛される事と、どっちが好きか？」と、暫く考へて見る。「愛する事の方が愛されるよりも幸福だ。」と答へた。

愛するると云ふ事は如何に難かしい事であらうか。物を愛する。人を愛する。

愛は純な程美しい。母が子に對する愛が此の世に於ける愛と云ふ物の中でも最も美しい。と或人が言つた。世の母人よ！それは眞實であらうか？ 若しも愛情と云ふ物にも一種の流行と云ふものがあるとすれば、私は現代の母の愛の中に、子に對しての自分自身の虚榮や權利が含まれて居る事と多く認めて、悲しい心にもなつて行く事がある。

それから夫の妻に對する愛、妻の夫に對する愛、と、これは餘りにも漠然と



して居て、一二の例に依る事を控えねばなるまいけれど、お互にハカリに掛け  
て切賣する愛は興へられた愛より多く自分の愛を安賣する事を惜しむ。

他人であつた時に、より多く愛し合つた者が、一旦夫婦になつた爲に、お互  
に憎み合はねばならない事は又悲しい一つの現象であらう。打算的な愛が其處  
此處で交換されて居る。刹那々々の感情に支配されて愛は深くも浅くもなつて  
現れて行く。一つの感情が言つた。

「それではお前の心は愛した事があつたか？」と、「あつた」と答へた。

素直な心で、人をも物をも愛する事が出来た事は幼い子供の世界に於て、最  
も多かつたと思ふ。成人した今日、私の心は全く愛する方向を見失つて了つた  
様だ。これは確に幸福ではないのだ。

心の奥底に根強く横つてゐる或種の感情が、希望と云ふ物の灯を吹き消され  
た様な同胞の心を、三角形の鋭角の様に鋭くさせてゐる。そしてキャンプの其  
處此處でこの痛い友情にヒヤリと氷の様な冷さを感じさせる。

何も彼も浮つすべりで確かりした根拠が無い。

小さな事件も此處では出来得る限り大きく膨張させて、お互の鋭角がそれを  
享樂してゐる。博愛をモットーにしてゐる筈の×××××がどうかすると戦争  
の手先をやつて居たり。愛のない自由郷は弱い者の心に暗い毎日を連續さして  
行く。淋しい思ひに耽つて行く心にシヨボ／＼と降る大自然の雨音が快く泌み  
渡つて来る。更け行く夜のキャンプに窓の灯は一つ々々消え去つて、やがて夜  
の物影がソク／＼と押し迫つて来る。

(終)





# 労働心理

矢形溪山

シカゴに来て工場に働いても、商店に働いても同僚から聞く同じ言葉がある。それは「そんなに働くな」である。これまで一時間に五十の能率をあげたものに、一人が入つて来て六十の仕事をする、六十と言ふ平均率にあげられて全體の人が同じ小額の給料で、よりハードに働かねばならぬ恐れがある。と云ふ原則から出發した聲である。多くの日本人の働いて居る鉄工場、製紙、製菓、製本工場到る處に其聲がある。結る先輩の白人より、おとなし

く、少し馬鹿で、能率の上らぬ程度で自重するのが一等賢いやり方らしい。處が日本人の一世は殊によく働く。先天的の忠實性からでもあらうが、それが抜け駆けの功名となり、フォーマンへの阿諛となり、仲間の平和を破る事になる。

土曜日のタイム アンド ハーフ、日曜日のダブルタイムに日本人は金欲しさに忠勤する。之を見た白人は、ヘル ウイズ ダブルタイムと嘲笑つてゐる。正にセンター外に生活せんとするものに對する警鐘である。

多くの工場は今三ツのシフトになつて居る。が中々八時間キツチり働くものがない。三十分の食事は四十五分、十五分の休憩は二十一分となる。

それフォーマンがまたと言へば、ヤ



レソレで女工の手は忙しい。フォーマンが行ったとなると口が忙しい。それを知らせる役目がフロア マネジャ―だから振つてゐる。

タイム カードは午後四時半にポンチするのだが、女工は四時頃からエプロンを外づけし、ハットをつけ、手袋をはめ、規定のひけのタイム十五分前時計の下にキチンと列んでゐる。

キャンデーは喰はぬと言ふのを、隣りの女工は持つて来て無理にポケットに捻ぢ込んでくれる。ブックは讀めぬと言ふのに、わざ／＼包んで外まで持ち運んでくれる。「水清ければ魚棲まず」薄給に悩む女工は永い間に、かうした妙な道徳に律しられてゐる各工場である。巡査は厳しく、バッヂをつけて立番をしてゐるが、是もお役目といふ程度の

ものらしい。一人檢へると全部が止まる恐れがあるから。

だが職 同士の仲がよい。日本人に對して偏見など藥にしたくもない。隣りの古い女工は報告やら、記録やらに困る日本人一世のヘルプを細ま／＼としてくれる。時々行はれるパーティーも和やかに進行して、ポンチに酔つ拂つて愛嬌をふりまく女工も僅くはない。出所する人は安心して來たらよいでせう。

ある軍需工場で、ポストンから來たボーイスがレデオの糸金を巻く仕事を請合つた。手先の早い日本人は素早く從來のレコードを破つて、週給百円、百五十円のチャキを受取つた。

主人のジューは驚いた。忽ち一個七仙のものを五仙に値下げした。日本人



は之にも屈せず、二週間のうちに元の能率をあげる事に成功した。三度目に主人は材料の高價を言譯として、再びカットしたので遂に全部の就働員はストに入つた。

だが他の何れの職場に入つても、之に近い給料を求められる可能性は全然なかつた。少し時日が経過して主人は優秀な技能をもつてる青年に復職を勧誘して、結局ストライキの主唱者が馬鹿を見て、其上に全部の人々も唯々諾諾其カットに應じる外に方法はなかつた。こゝでも過去の記録を破つた日本人の精勤が自分等の損になつて、工場主を肥やす材料とのみなつた。「そんなに働くな」の聲はかうした幾多の工場心理から生れた、ボースの搾取に對陣する武器かも知れん。

私はシカゴに五百一ある連鎖店の一つで、農産物の係りに職を得た。一ヶ月の内に二千四百弗の賣り上げから三千六百弗に進めた。其外に會社から要求する三十三パセントの利益以外に一ヶ月二百四十五弗の純利をあげた。會社は目をクル／＼させた。同僚も、日本人青年も増給を要求せよと勧めた。私は「仕事は私がしてやる。給料をあげるのは向ふの仕事である。儲けさせてやらねば、給料はあがらぬ」との論法で沈黙を守つた。

處が二ヶ月後になつて驚くなけれ、一週二弗五十仙の昇給をしてくれた。私はがっかりした。私の論法は道德的にはよかつたが、競争の世に出て自分を保護する事を忘れてゐた事に始めて醒めたのである。



彼等資本家は「黙々として牛馬の如く働く無智の外國人は満足して其日を稼ぐであらう。」といふ觀念から、私の働きに對する報酬を與へんとは思ひ及ばなかつたであらう。

吾々の考へる様なモラルで機械的な、低級心理をもつ階級の下に働くには、吾々は出直して來ねばならぬと思つた。失敗のない様に出所する人に警戒する所以である。

だが總括的に私には考へさせられるかうした資本主義一点張りが生み出しつゝある反感は日々に嵩じて、何れの日かへ爆發の機運を構成しつゝある事に少しも疑ひはない。聞けば極樂の様な民主主義國がいつまでこの儘で榮えるものか、私は大きな疑問をもつてゐる。

(一九四五、一月二十二日)

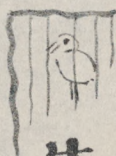
*Compliments*  
of

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

WHOLESALE-QUALITY GROCERS





# 生活メモ

十二月の日記から一

と き 子

これが冬の氣候かしらと思ふ如うな暖かな日和、庭先のエルムは枝毎にまだ固くはあるけど、まろい可愛い蕾が春への準備をしてゐる。

戦争など忘れた如うな静な光景。

今年の仕事も一段落付いて、荷を下した如うなホツとした軽い氣持ち。時計を見ると五時十五分を指してゐる。大急で家へかへる。手を洗ひまもなくメスの鐘が鳴る。

身體全体にゾク／＼する様な悪感を押へ／＼して来た一週間の無理が祟つ

たのか、氣持ちの緩みからか午后になると、首筋から背へかけて激しい痛みが来て、割れる如うな頭痛と、やつ／＼く如うな熱が全身を包んで終つた。遂々流感にやられたなと思つた。

無理をしない様にと注意された時、二三日休んでおけばよかつた。と、後悔に似た氣持ちで夕食をぬきにして床に就いた。醫師に診察して貰つたらと勧められたが、多忙なドクターをわづらはしたくないと思つて遠慮した。急性肺炎、氣管支炎、淋巴腺炎等々冷たい豫感が神経を尖らせる。消燈した部屋の左右のベッドからは、家人達の微かな鼾が耳について眠れない。シェードの無い窓の薄いカーテンを通して蒼白い月光は室内に流れ込み、枯れ残りのキヤスタの葉が異様な影を投げて



居る。フト数年前神経衰弱で縊死を遂げた或る人の傍が幻の様に浮んで来て背筋に冷たいものを感じた。昂ぶつた神経を落ちつけ様と静に目を閉じてみたが、空が白むまで遂々一睡も出来なかつた。

朝食が終つた頃から婦人達の賑やかな聲に交つて杵の音が聞えて来た。今日は部落の餅搗きなのだ。遂々三度目の春を迎へて終つた。今年もほんとに年はたばしい一年だつた。何時も何一つとして部落の爲に手傳ひも出来ないで眞實にすまないと思ふ。何か自分に出来る事で手傳ひさせていたゞく時もあるだろうと勝手に理窟を付けて、蜘蛛の巣に覆はれた天井の無い屋根板を右から左から数へて居たら、山口夫人が、「食堂にちつとも見えないが。」と言

つて見舞ひに来て下さつた。

「明日は大丈夫起きますよ。」と言へば「神様が休みの時間をあたへて下さつたのですから感謝してゆつくりお休みなさいませよ。」と仰有る。

「こんな頂き物感謝も出来ないでせう。」

「でも病氣でも與へなかつたらあなたがお休みなれないでせう……ねーどうでござぬます……。」と見事にやられて終つた。

「ほんとに左様かも知れませんか……そのつもりでゆつくり休ませて頂きますよ。」

「左様なさいませよ。」と快活な笑聲を残して歸つてゆかれた。

山口夫人に言はれた通り、事實病氣にでもならなければ休む事の出来ない多忙な私の生活なのだ。健康なのをいい事にして感謝する事もなく随分無理をしてきてゐる。



微熱がとれないので、今日も遂々離床する事が出来なかつたか。

日頃讀みたいと思つて居た二三冊の書物も讀んで終つた。書棚を漁つてゐるとフト昨年の古日記が手に觸れた。一枚々々目を通してゐると〇月〇日のところに、「〇〇〇〇の席上で彫刻學校は生徒から。〇〇錢の會費を收りながら會計報告が出て居らぬ云々」と某氏から〇〇が出て居る。出来たら次の〇〇〇〇までに報告書を出す様に、との、其筋からのお達しがあつた。

早速報告書を書いて差し出したら、それで解決したらしかつたが、解けないのは私達の感情だつた。板谷先生も其の事に就いて随分氣を悪くして居らした。二三日は食事が不味かつたと

苦笑して居らした。

拾六弗を標準としたキャンプの生活から云へば二十五仙は小さなものではないかも知れない。だが其の〇〇〇を私腹する様なそんな下賤な心は微塵も持つては居ない。勿論金を儲ける爲の仕事でもない。

何事に依らず外部から見た其の仕事の内容は第三者に理解されてゐない場合が随分あり、又こんな事を〇〇〇などに提出するのだつたら、何故もつとよく調査して呉れなかつたかしら、又さうするのが順序ではないかしら？例へそれが他の問題のゆきがかりとは言へ關係もない者が引き合ひに出されるなんて迷惑な事だ、と、生意氣さうに語つて居た私に、

「そんな小さなコヤ／＼した感情に何



時迄も捉はれないでもつと大きな人間を造りなさい。もつとしつかりした自分を造つておかなければ明日と云ふ大きな生活は出来ませんよ。昨日の事は昨日限り忘れて終ひなさい。」と板谷先生に諭されたと記して居た。

だが此の諭された言葉を今日迄讀つて来ただらうか……。

決して忘れては居なかつた。

此の小さな事件に捉はれて遂々一年を過ごした事は事實だつた。

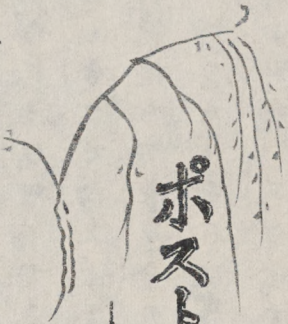
不安を抱いてキャンプ入りをした此迄の生活の裡でお互が持つてる技藝を出し合つて向上して行けたら、と思ふ氣持ちが遂々今の生活に深入りさせて終つた。それに畫家でも彫刻家でも無い私が、又年齢から云つても相當に

相違のある年長の方々に、先生然として相對してゆく事は無理な事であり、心苦しい事だ。だが仕事に對する責任と實意は片時も忘れては居ない。或る人は莫迦だと嘲笑して居る。だがそれでいいのだ。

收容所を閉鎖する日も遠くはないらしい。私達の仕事の生命も長くはないだらう。最後の日迄眞實に莫迦になつて自分の仕事を愛して生きやう。そして私共の仕事に充分の理解を持つて何彼と便宜をあたへて下さる部落六の方々に心から感謝しやう。

明日は元日だ。どうせ起きられさうにもないので、ベッドの中で迎春する事に觀念した。来年こそは、小さな感情を離れて明朗な心で生きて行きたい。





# ポストン生活印象

(六)

―除々の進行―

貴家志ま子

家の周圍に培ふ柳などそここに芽を出し初め、バラックとバラックの間の空地に蒔いた野菜の芽も、地上に頭を出し揃へて遠目に青くなり出した。これが爲に吹き巻く砂煙も余程避けられるやうになつたのである。

子供等のためにセージブラシで屋根を葺いた廣い陰のある遊び場所も、部落の男子等の日曜日の仕事として遂に出来上つた。

バラックの長い筒抜けの一室に、何の仕切りもなく幾つもの家族が雑語のやうに並べた寢臺、洗濯ものまで室内にブラさがつた光景、夜になればこのバラックの廻りに幾つもの寢臺が、室内からはみ出たやうに外側に並んで人々が寝てゐる。こんな場所は眼を掩つて通り度い氣持のしたこの状態も、團が出来て追々と無くなつていつた。二家族入つてゐた室も除々に少くなり、聽ては全部の人に及ぶべきであらうと思はれるやうになつたのである。今度は食堂に續く廚の床だけにリノリウムが先づ敷かれ、程經て食堂の方もはられた。食事時に部落長が諸事項のアナウンスの後、皆さん御覽の通りリノリウムが敷かれ



ました。以前のやうに飲み残りの茶水などをフロワーに「ほさないやうにお願い致します。子供さん方にも御注意下さるやうに申します」と言はれた。煤でられるやうな暑さの爲に間断なく水が飲めても、水道口のある場所まで飲みに行かなくてはならない。汲み置きの水は忽に室の中でもぬるき湯のやうになるので、或人等は水道用の鉄管を求めて自室に水を引いた。其内に我も我もとその鉄管を買ひ入れてこの不便を補つたのである。

各宗派の教會、青年會、學童の校舍建築準備も除々に進み、婦人會の組織、文藝協會の誕生、英語、日本語、造花、活花、編物、裁縫、柔道、圍碁、謡などの娛樂機關も生じ、學業及び技術習得の機會も各々の職務の余暇に興へられるやうになり、公園と名付けられた場所もメスキッドツリーの林の中に出て上つた。

各部門の就働者たちの上にもその職務上の秩序改革が行はれ、轉住所規定に基いて十六歳以上の健康体の男女は悉くそれらの職に従事した。是等の就働者に對する支給額は月俸十二弗、十六弗及び十九弗の三階級であつて、十九弗の最高額を支給され得る者は最も責任ある業務の擔當者で、業務履行に必要な訓練ある者及び専門的知識を有する者に限られ、就働時間は午前八時より十二時迄、午後一時より五時迄、土曜日は午前中だけである。(この月給の外に被服料として毎月支給される額は六種に分類された。即三弗七十五仙、三弗五十仙、



三弗二十五仙、三弗、二弗五十仙及び二弗である。この雇傭に関する詳細は行政部指令第二十七號に發表され、總てが十個條となつてゐる。

第壹條 基本方針

第貳條 戰時轉住作業隊及顯功章

第參條 顯功審査委員會

第四條 支給及作業規定

第五條 就働時間

第六條 公正雇傭實施手續

第七條 失業手當

第八條 被服料手當

第九條 賣店部屋傭

第十條 個人關係雇傭

以上で各個條は何れも數種の項目に分類され、かなり綿密なものである。この規定に對する住民の認識を深めるためには、必要に従ひ時に應じて其項目の中の一部分の詳細を、各部落長が食堂に於て再三再四アナウンスをするのである。

最初の月給支拂ひ場所はアドミニストレーションであつた。其前に長い人の列が續き焼け付く炎天下に待つ事一時間二時間三時間、中には五十仙を受くる爲に四時間待つたといつてこぼして居た人もあつた。第二回目是一回目に比して待つ時間は少くなり、第三回目からは各部落クワドの一ヶ所でこれを行ひ、後には各部落事務所で各々の順番も定まり、三十分位で済むやうになつた。月給支拂日の事務所の前の長い列、食事時の食堂の入口から長く長い人の列、何と列を造る事の多いこの生活であると思つた。



俳句 春雜詠二人抄

△春雜詠

吉里竜耳

造花する室の陽射や梅佳節  
皿のもの今日もそのまゝ春の猫  
豚の背に黒鳥遊ぶ牧麗ら  
アメリカ松春の嵐にたわいなし

△加州視察

野や山笑へど庵すでになし  
舊往地荒れ果しまゝ草萌る  
みへり来て久しぶりなる春の海

△第二館府の公園にて三句

関 五松

鯉に播きしパン屑白し冬の水  
いさゝかの冬水落ちる作瀧  
四阿に北風よけてバス待てり  
△ポ・ストン街路景  
繪傘往き大蛇の目往き冬の雨  
床下に覗く黒猫冬の雨  
水仙の花に添木をして佇てり  
冬雨や隣の娘今宵發つ  
焼べ足せば又開きけり焚火の輪  
るねむりつ讀みつ爐邊や雨の音



ポストン  
文藝

詩壇

小川明選

# 影

外一篇

牧さゆり

失つたすべての形のものを見入つてゐる馬鹿者。  
友愛も、信頼もない冷たい笑ひが  
ピエロの影のやうにつきまどふ。

青色の電燈のカバーからもれ出る灯の弱々しさ。  
蒼白い手に浮んでゐる動脈の色。

みつめて、みつめて――――

ほろ苦い味を舌の上に轉がして味つてゐる。



## 吐息

にがい吐息のすたった時は  
永遠に私が無くなった時なのかしら。

ヴァイオリンのケースを開いて見たが  
左手の指は 子指も薬指も中指も人さし指も  
皆思ふ様に動かなくなつた。

G D A E それくの線から出る音はみな  
うつろに私の耳に響いた。

優美なメロデーは消え去つて行かうとする！

ヴァイオリンとボーを持つた両手の指は  
めいめいの哀しみがあつた。  
それくの宿命をもたねばならぬ十本の指達よ！

私は哀れな両手をいたわりつゝ  
にがい吐息をフウツと二度程かけてみた。



# 生活断章

片井溪巖子

## おぢさん

みんなの二世達は、  
何かかにかにつけて  
いつもおぢさんと呼ぶ。  
可愛らしさのないでも無いが、  
またその不自然さと  
あまりの不躰さを。  
不満不快に思ふものの、  
おり／＼鏡に映つる時  
この半禿の白髪を。  
こんな歯迄ぬけたる、  
自分の顔でありながら  
全くおぢいさんと呼ばれても。  
これぢや少しも惜しくはない、  
間違ひばかりの私も  
はや六十歳になりました。  
悔ひの容積  
ついに償ふ可からざる



戦血のしたたる傷口を  
哭いて／＼泣ききれない。  
いづみのように溢るる涙もて  
この生涯を洗ふたとて、  
ついに苦省に終るのみを。  
しじゅう氣にする痛しさ  
この惱しさを抱ひたまま、  
キサラギの空へ隠れたい。

### つきひ

まことは、月日の眼。

### 髪

明日は元旦、  
こうして無事な顔剃る。

### みかんの色

につぼんみかんの嬉しくて、  
窓はみゆる限りの雪景色。

### 戦禍

ひごと戦線へ行く顔  
もどつてきたかほの  
せわしいステイションにて  
片手片脚の兵士の  
その若き顔みる尊さ。



# ★信子の誕辰夜

マツイ シュウスイ

脈搏が急いでゐる  
常ならば鼓動は  
如何にもならない  
——この發作だ

産科室の隣では  
澤山な嬰兒が泣いてゐる

僕はただ沈黙  
否 失心をしたやうに  
醫師の出入を覗いてゐる  
あの醫療器械の動く音

妻の息音……

聖誕歌の聲さへ

我が心を悩ます

× ×

愛する妻を離れて十八餘時間

心は焦れつゝ

夜は深みゆく

向ふ側からは

また聖誕歌の合唱がフォーラス聞えて来る

僕には

妻と生れ来る子との運命を決める瞬

間

× ×

では 最後にと

二人の醫師がコートを脱いで

(待ちなさいと言ひ乍ら)

手術室に入る

おゝ僕は息を殺し



醫師に

また神様に祈つた

x x

沈黙

器械の音

あゝ遂に太息は窓邊の空氣をやすぶ

つた

僕は ホット立ち上つた

あれでいゝのだつたらう

確かに 確かに

でも不安なまゝに

僕は この瞬間

世界の總ての欲求が度外視であつた

……  
嬰兒の泣き聲が聞える

醫師が出て来る

看護婦が微笑を送つて呉れる

神秘的な夜は静かに／＼更けてゆく。

一九四四年聖誕前夜傳馬市マシ病院にて

『この拙詩を私の尊敬する國友  
信彌先生に捧げ、同時に私の  
初見の信子と命名して下さつ  
たことに感謝の意を表す。』

思出  
歡作  
ポストン小唄

ツルレーキ 山田如骨

主は炭焼き煙がのぼる

里ぢやお晝の鐘が鳴る。

背戸の堀割目高が散つて

春が来ました水の音。

唄をあげてるキャンプの兒等にや

戦争知らずの春の風。

化石探ねて草花踏んで

野越え谷越え日もすがら。

鉄木<sup>カクギ</sup>切るかよはるかな谷間

峯にこだまの斧の音。



# 冬枯れのラドンケスプー

山中稔

冷い北風が吹いて来る  
かさこそと落葉が轉つてゆく  
僕は  
裸木の幹に身を寄せて  
冬をみつめる。

何處までも枯れ續く野面  
寒風に地肌をむき出してゐる山々  
高き梢  
低き梢  
あたふたとかくしてゐた  
恥かしきもの　みにくきものを  
いまは素直にさらけだして  
そのまゝの自分にかへつてゐる眺め。

萬物はみな素裸になつて  
新しき出發へと　今！  
零の一線に誓揃してゐる。



# 何處クへ行オくバ

木内春波

戀しきを朝に送り

親しきと夕に袖を別つ

聲のみは強く 手は確く握れど

胸ぬちを流るゝさびしき血潮

運命とは云へ 運命とは云へ

哀しからずや 寂しからずや

戀人よ 親しき友よ 何處へ行く?

× ×

血と汗と涙もて拓サり開きし

マスキッド林 セイヂブラシユ

毒蟲は退治し 野獸は驅逐して

漸ヒトくに人間住む郷サトとなせしものを

三歳前追れ来て また追立られて

散々に蜘蛛の子の如 西へ 東へ

×

×

そのむかし

埃及を追はれし民族も斯く

浮雲のそれの如くに

風に追はれて流れゆきしか

當もなき旅から旅へ……

× ×

狭庭に微笑む草花よ

伸び伸びし路傍樹の高き梢よ

枝に梢に來啼く小鳥達よ

畑には青々と野菜のうねり

狭苦しき一室住ヒトヘヤひの屋根裏にさへ

なじみしものゝ愛着は残るものを

運命とは言へ 運命とは言へ

同胞ハラカラよ 別れ別れて何處へ行く?



# ポピイの會

正月例會於餘子犬居

大月喜三郎

家ごと青空を少しけむらして正月元旦  
ストーブへ炭をつぐことの幾度か夜をたぬしく

高木好文

ほろりと酔うて昔の聲が年とつてゐる  
雀つぎつぎとんで来る凍て地のパンくづ

廣瀬朱草

冬の日うけて一とまあかんぼうの匂ひ  
白の洗面器掃除されてゐて洗面所誰もゐない

松野下龍

加州へ歸れてもかへらぬと老人の髪がしろい





寒ン雀数しれずとんで来てキャンパタ焼ける

府川眞砂夫

暖爐の夜風がすなほに抜けてゆく一枚の窓かけ  
この子も征く雲の白さのいよ／＼白く

米倉林泉

ニコニコとにぎりあふたあたたかさ  
私に生きたまふ母の忌日が正月十日

米倉久枝

起きいでて夜半の寒さ被せてまわる  
恙なく今年も暮るるどの煙出しからも煙

塩澤徹四郎

敵々のかげ雪を残し陽に映へて麥青みある  
氷点を下る朝闇にメスの鐘のねいろ

松野寶樹

午後の看護婦の少し勞れたる爪紅  
マキノウ姿の肩淋しく娘になる前のむすめ

林百尺樹

大地むく／＼動くやうな羊群移り行く枯野



受話機手にして夜の冷たさにふるる

田原紅人

めつぽう寒い月の明るさに雪の山重なる  
ころした中に新年がくる朝日のつらら

細梅さよ

影にかげのしかかつて寒いあいさつされる  
よしあしごとともとかくおみなごのとしのくれ

中村夕佳里

霜の朝をあふた二人が二人で呟してゐる

壯丁を見送り

振った帽子かぶること忘れてゐた

片井溪巖子

日ごと戦線へゆく顔もどつた顔のステーション  
屋根と窓の冬でありモルモン堂の裏住まい

片井京香

旅より

歩くほかない私をのせてゆく汽車  
山へ山重なる方へ煙吐いてゆく



もう逢へまいと言ふ人の手を握り手を振り

河口幹逸

何にもかも諦めてはゐるものの冬空の深さなる

森本彌山

撤退廢止令一句

とうとうくる日がきて雪降りだした

あやぶみ渡つた凍河のはばを見かへる

ミヅラにて

古屋翠溪

落葉する落葉積む車のホロにも落葉

アメリカの北のはてでくれ魚釣つてゐる

武井古流星

よその時計が打つ逝く年のこんな生活

煙草買ふ列に居て雪雲とろく消えた

森田餘子丈

寢に星がつまつて師走のストーブ温かすぎる

冬のこんなよい日のSYMPHONYはニューヨークからの



ボストン  
文藝歌壇

永瀬勇選

睦月歌會詠草集

(順序不同)

牟田靜子

戦ひの果つるきざしも見えずして收容所に三度びの春迎へけり。

戦ひは悲しきものよ幾百の若人の命たちまちになし。

楽しくし鳥作りつつ思ほへばかかるとやすさは又となかるべし。

世に出でて子のため又も耐へ抜かむと心きほひて夜のいねがたき。(加州帰還)

デンバー  
安井静女

父引かれて三年の留守の寂しさを吾と守りし娘も旅中かむとす。

樂しみて子等の生ひ立つを見て來しが今は来つ子も離れゆかむとす。

除夜の鐘に風邪の床中起きなほり涙み涙み祈りす早き(和を)。



ネブラスカ 赤 星 さ と

親しかる友等来たりて元旦を共に祈りす平和くるべく。  
庭木々に雪凍りつききらかにかがよひ光れり今朝を初日に。  
雪ふれるコーン畑にはむ牛の脊にも真白く雪つもりをり。

外 谷 千 代

三度び收容所に迎へし年の瀬のことをなつかしみ思ふ日も亦あらむ。  
金せん花一と本咲きてうら美し霜枯れ果てし真冬の庭に。  
右の頬を打たるれば左も向けよとふ覺悟も要るべし加州帰還は。

児 玉 な を

晝を暗らく砂風にけぶらふ庭前に白きもの落つは正に雪なり。  
雪ふりて一と夜にはかに冷えにしが朝光に見ゆ山脈の白雪。  
收容所閉鎖は近ししかれども何處にゆかむ當所あらぬを。  
收容所閉鎖は近し老いの身の社會に生きむとはすれいかに處すべき。

クリスタル市 川 原 八 重

背とありて身はすこやかに初春を家族キヤンプに今年は迎ふ。  
初日の出うららに照れど戦乱の世をし思へば心副ぐはず。

祖國外務大臣よりの賀詞時報にて讀む。

はろめにも海山越えて届きたる大臣の賀詞を讀みて讀む。  
祖國の大臣の賀詞のありがたと言ふすべ知らに涙あふるる。



清時文子

我名をばおぼえて常に祈りすと宣うす師のまみやさして清し。  
我と我が心の歩みともなはず思ひ思ひて一と日暮せり。

鈴木縁松

あかねさす夕焼空に流れきて醜しづの灰雲黒くただよふ。

夕焼に落葉あかくてる森中きて空には見えぬ飛行機の音。

堀水に綿雲うつるこの夕べ青夢細の空を雁わたる。

大空 鯉

夜汽車にて

合圖する驛夫の聲す吾汽車は今ゆるやかに夜半の小驛えき出づ。

汽車の上に車輪のきしみききるしがつかれし吾れは寝入りたるうし。

この驛中來りたる客ひとかうす暗き車内なみを往き來して席探しをり。

内堀 三太郎

幼稚園の庭の日溜りに幼な子等その手つなぎて輪をなし唄ふ。

たはぶれに小さき口よと吾が言へばあはれ大口子はあけて見す。

轉住の策は政府にうちまかせて初日を迎ふ心のどけ。



北林静江

うまごやし下葉芽ぶきて川沿ひの畑一面に青ずみて見ゆ。  
岸に立つ柳いちぢるく落葉して池の面おもててを更にくまどりぬ。  
大戦のあるは忘れて我等今日をうち急らぎつつ餅つきてをり。  
賜暇得しと文によせ来し兵の子よ汝おれの征く日も近づきぬらむ。

貴家志ま子

驚きて鯉のにごせし池の面にあまた落葉は黄にゆらぎをり。  
林より斧の氣配のきこえぬしがやがて幹裂けて倒るる音す。  
歩みつつ夕焼にまなこ奪はれて友の話ゆ心それけり。  
しぶりつつ宣らさむとして言葉より先きに笑顔となり給ふ父。

赤松傳代

畑の土掘り起こしてはあらはるる薯拾ひをり老人は籠に。  
空高く旋風つまじに上る一と片の紙は白鷺の舞ふがにも見ゆ。

永瀬正臣

戦ひの世にはあれども和やかに妻や子とゐて年とりにけり。  
兵の叔父に豆傷送らなと幼子が去いひしと祖母そばは涙ぐみけり。

米軍の手を経て渡り来たりし國旗を拝みて。

兵士つはものの遺品の旗に向ひゐて小島に果てし生命をぞ思ふ。



齒車は二六時中を鳴りしきり人も機械の如く働く。

敗くるとも恙あらさず帰りませと征途の夫に言へるひとはも。

昨夜よりの寒さに焚きし煤煙は積もれる雪を黒く染めたり。

移り来てなじまずをれば歳の暮を舊友遠くきて吾家にぎはふ。

大園晴子

憂き事のなくて過ぎゆけば歌心湧く由もなく月日ながらふ。

子等数多さわける中に静けさを欲りつつ吾れは歌思ひをり。

寂しさをまぎらはさむと歌思へば次々湧き来かなしき歌のみ。

柳本錦子

すみ透る朝空すがし珍石拾ふ砂山の静寂に鳥が音きこゆ。

石拾ふ砂山の斜面の暖かさ睡月ま晝をホピいの花咲く。

晴れ渡るまひるの砂原に火をたきて肉焼きにつつ握飯を食すも。

永瀬勇

夏拾遺

残りぬし末の一人娘も出しやりて今宵さぶしく父母はぬまさむ。(ぞ轉出す)

送り出すま際の握手娘としつつ言葉すくなきは母泣けるらし。

行くものは残れるよりも思ふらし初の泊りゆたよりぬ妹は。

日のあたる巽の空に土用雲ひかりひろごりてうつそ。



## 後記

一週間ばかり降り續いた雨もどうやら止んで、まだ雲の多いながらも薄ら日の光の見られる程の小廉を得た。今日のお天氣は、何んだか吾々の午後の歌會の爲に其うして下さったのだ。と云ふやうな感で、自づからお天道様に、感謝の言葉を捧げねばならぬ思ひであつた。此の念ひは歌友諸君も同じやうに持たれたものの如く、午后からの歌會に足を運ばれた人々十四名に達し、前回に劣らぬ程の盛會振りを示したことは喜びとする處であつた。其れと共に諸君の熱心の程も伺はれて意に足るものがあつたと思ふ。尚ほ他に二、三、何時も出席される方々で、今日は風邪の爲に欠席を餘儀なくする。と云ふ言傳てを下さった方々があつたが、さういふ人々は充分注意あつて、次回歌會までには必ず出席出来るまでに元氣を回復されるやう祈つて居る者である。天候も未だ此處當分の間は不順な日が續くだらうから、元氣で居られる方々も一層用心して、風邪に取りつかれないやう、そしてこの道に精進努力あらんことを祈念する次第である。

尚ほ少し餘白が出来たから書かせて頂くが、最近シカゴ在住の矢形溪山氏から音信あり、歌會の皆様へよろしく、と言つてありました。氏は神經痛で、既に三ヶ月程も休養されてる由、お氣の毒の至りである。一日も早く御全快の日の来たらむ事を祈りつつこの鈍筆を擱く。(一、二五、四五)



# 尾上柴舟の歌

数首

## 山かげ

薪森原といふに叔母の墓あれば詣づ。

山かげは土の濕しめりの深ければ燃えざる香も寂しまれつつ。

雨少し来る。晴るるがまゝに山を下れば虹大きく立てり。

目の前の川に今立つ虹の輪わを趁おひて視線は野を越えにけり。  
時雨せし田の面しらじら靄も立てど虹は末すえまで明らかに見ゆ。  
幅廣く立てる虹より透きて見ゆあかおさしたる夕草山ゆふくさやまは。

月明の夜二人の亡兄を思ふ。

真上なる月の光にうなだれて真夜の竹葉は影重なり。

共に出でて竹の葉かげもふまむものかかる月夜を兄ぬるならば。

三人して雪拂ひせし日を遠み影の少なく竹もなりぬる。

残りぬる竹の葉かげをふみにつつ一人仰ぐに寒き月かな。



## 選後隨錄

娘の學びゆるがせならず淋しさは語らざりけりこのうつろ心は。

此の一首の中心は三 四句にあるものと思ふが「淋しさは語らざりけり」と言はれても 其れを必然的なものにするだけのことは何處にも言はれてないの で 一寸何を意味してゐるのか難解なものになつて仕舞つた觀である。つまりあまり抽象的で 具象化表現が足りなかつたと云ふところに落着くだらう。「娘の學びゆるがせならず」だけでは未だ三 四句を生かすだけのものと成つてゐないと思ふ。

御戰の名譽の負傷のみしるしの勲章賜びぬ我が娘が智へ。

此れは唯或る一つの出来事を報告しただけであつて 所謂報告歌にすぎぬものである。作者は此の事柄によつて何を感じたか 其處を捕へて一首に詠み上げる可きではなかつたか。今言つた如く此れを一種の報告文として詠んで見ても 此の「の」の重複はあまりにも無反省な表出ではないか又 下句の「吾が娘が智へ」も うるさすぎる程の説明で もつとあつさりとやらなければいけないと思ふ。



敬虔の念おもひの欠けるを教へられ苦き涙を味はひにけり。

右の作は一つの概念歌と云ふ種類のもので、讀者には何の感興も刺戟もあたへぬものだと思ふ。作者は何故自分の味はつた苦き涙の経験の中から取找されて詠まれなかつたのか。其うすればこんな無氣力なものでなく充分に讀者の胸を搏つだけの力ある作が出来ると思ふ。一考を要したい。池に注ぐ水より蒸氣立つを見て我も大きく呼吸いきはいて見つ。

此れも一つの無感動歌と云ふ種のものであると思ふ。歌意は池水より上る蒸氣を見て自分も大きく呼吸をはいて見たと言ふのらしいが、其れが何うなつたのか。そこからがこの歌の根幹となるべきところではないか。そこが言はれてないから無感動歌だと言つたのである。原作のまゝでは唯自分の動作を説明しただけである。若し寫生的表現を採るのであつたら、もつと繪画的に對象をはつきりと一讀、讀者が眼前に描き得るやうに表現せねば駄目である。

人生の航路は涙只管に求め入らばや精神界へ。

わが行けは明るくなるとのらしたる舊友きゆうゆうに文書く哀しき文を。

右二首作者は別人である。一の歌言葉ばかりが目立つて意味が解らぬ。二の歌は下句の「哀しき文を」が何を意味してゐるのか解らない。(完)



## 満座那吟社句抄

木村白嶺

打並ぶ千戸の屋根や初鴉  
訪ね来よキャンプロも端の落葉宿  
殺到す煙草の客や賣初め  
凍て庭や車輪こはれしツイワゴン  
マーブルの外れて射にける落葉かな

安田北湖

私生児の混血児の汝受難節  
王園湖一筋碧き枯野かな  
砲火なほ熄まず枯野は夜となりぬ  
梨の杵林檎の杵や餅を搗く  
寒月や剣竝びにセラの嶺々

永井翠畝

羅府へ行く行かぬ話や村の春  
出征の古子に蔭膳老の春  
佇めば人の世遠し落葉山  
島々の話は哀れ爐火燃ゆ  
かざす手の石鹼荒れとやメス暖爐

小坂静子

手と手と手朝のストヴにぎやかに  
ストヴの燃ゆる音のみ人を待つ  
高らかに聞こゆる琵琶や初日會  
柵中の敵國人もお正月  
かたまりて芝に遊べり初雀

土屋天眠

征きし子の父母をいたわる初使  
情報に爐邊にぎはふ夕かな  
高原のぬくき日射しや鍛冶  
汽車煙一筋残る枯野かな  
筆端論語の字句を選びけり



山口牧村

玩具舟浮べ凍れる樽の面  
此の國の掟變りて年明くる  
形ばかり部屋整へて雑煮かな  
落葉波残して颯とバスゆけり  
留守番の間々に來て掃く落葉かな

上村若舟

道しるべあれどはてなき枯野かな  
さびれゆくキャンプめぐりて野は枯るゝ  
一ト群の牛に日當る枯野かな  
メスの鐘待つひとゝきの暖爐かな  
寒月や嵐過ぎたる曠野より

山田天氏

枯枝に掛けしマツアの氷柱かな  
只石の起伏するのみ枯野原  
轉住の話ばかりや暖爐燃ゆ  
雪に映ゆシーラの嶺や初日の出  
聖典も供へてありぬ饅餅

望月奇風

藥草を掘る人ありぬ枯野原  
クリークを叩く柳枝の氷りたる  
クリークの氷碎きて子等遊ぶ  
拾七時吾より先に故郷の春  
配給の野菜にまじる落葉かな

山田耕人

轉住の生活を書き添へ賀狀かな  
晴れわたる今日の大セラ初鵲  
配給の餅を供へて寢正月  
一と雨に梨の落葉の降り止まず  
冬帽子編む日續きぬ身重妻

山崎玻璃女

落葉して孤児のあそべる園廣し  
よき年でありたき願雜煮餅  
讀み耽る句集露風暖爐燃ゆ  
濯ぎ物干すより早く凍てにけり  
冬帽の宗匠めけり 眠翁



# ポストン 川柳



## 古川柳句解

島原潮風

△お目見えの敷居にくわる女郎花。

句解 お妾などの候補に立った妙齡の女が、殿様の初見参に敷居外に畏つて坐つて居る。殿様から有難いお詞があつても、しぶくして素直にお請が出来にくい様子ぢやが、併しあれは女性の常で結局は釣り込まれて仕舞ふ。(くねるは、すねるに同じ。)

△禁酒ぢやとぬかしながらの山さくら。

句解 (ぬかしながらの山櫻)は平忠度の「さばなみや志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山さくらかな」の歌の文句を換つたもの。(ぬかし)は言ひの卑語罵つて言ふ。昨日迄は禁酒ぢやなど、威張つた事を言つて居ながら、今日になると矢張り昔ながらの山櫻で、花見に行つて思はず知ら



ず禁酒の制を破つて、櫻に浮かれて居るとは意氣地がないと罵倒した句。  
△十八で老いにけらしな座敷もち。

句解 (老いにけらしな) づゝゐつゝ井筒にかけしまろがたけおいにけらしな。妹見ざるまに。の文句取り。(けらし)は(けるらし)の略(な)は感動詞。なつたらしいなの意。十八は娘ざかりで禿から上つたばかり、然も座敷持ちと云ふから年増の様に見えるに意。

つゝゐつゝ井筒にかけしまろがたけおいにけらしな妹見ざるまに。(伊勢物語)  
△御幸まで峯のもみぢ葉ちらずにゐる。

句解 藤原忠平(貞信公)が宇多天皇の大井川行幸の御供申した時、小倉山の峯のもみぢ葉に對して、「小倉山峯のもみぢ葉こゝろあらば今一度の御幸待たなむ」と希望を一首の歌に詠みかけられたのであるが、後に

醍醐天皇の御幸を仰いで御上覧に供し奉る事を得たのはいかにも光榮な事で、今上を慰め奉らふとの院の御思召、と貞信公の希望を満足させて當日迄散らずに御待ち申したのもみぢ葉の、赤誠と面白さこそ感嘆される次第である。  
△むかしからしれぬで人の命なり。

句解 昔から人の命数は不測であると言はれてある。佛教では六十七十年を定命としてあるが、これとて假定的予言に過ぎない。で、貫之の歌に「あす知らぬ我身と思へどくれぬまのけふは人こそ嬉しかりけれ」暮れぬ



間の今日をば嬉しいと思ひ、幾多の期待を将来にかけてそれを樂しみにいつ死ぬとも知らずに居てこそ貴い生活が続けてゆかれるのである。約言すれば昔から人の死期は豫め測り知る事が出来ぬとなつてゐるが、それこそ人の命の貴さがわかるのである。

### △なきにしもあらずと書いた暮の文。

句解 いよく歳末と押し迫つて何かと御多忙の事と察します。さて御願ひ申すは別儀にあらず、年越に要する金策の件であります。實は餘所から覺する道がない譯でもありませんが、別懇の間柄なるに甘へて貴殿に御懇願申上ぐる次第、何卒御同情御助力を仰ぎたいと書いて歳末の無心状を送つた。さてその返事や如何に。

「なきにしもあらず」は兒嶋高德の詩句「時に范蠡<sup>はんれい</sup>無きしもあらず」の文句取り。△忙しい軍なまばに行きくれて。

句解 平忠度は平家中での武勇の士、殊に歌道の達人である。彼の源平の戦争中にも拘らず、さも忙がしい時であるのに狐川から引返して京の五條に居られる歌の師俊成卿の許に行き我が歌を撰集に入れて賜へと願つたが、其の折詠んで差上げた中に「行きくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし」の歌を千載集の中に選び入れられたのである。

これは實に風流武士の美談としてその芳名は遺詠と共に千載に傳ふべき



である。

然し後になつて千載集を調べし所「行きくれて」の歌は入つてゐない。  
あるのは

「故 卿花」

読人知らず。として

「さびなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな。」

の一首だけあつて「行きくれて」は入つて居らないのであるが、思ふに  
「故卿花」と「行きくれて」の歌を混同して句作したに間違ひなからう。

因に平家物語、源平盛衰記には、「朝敵となれる人のわがなれば憚り給  
ひて、只一首入れられける」とあります。

## 第五拾七回川柳句會

課題「奉仕」

島原潮風選

天

武智峯月

一億が國難開く丸となり。

評 一九となりて國難を開くと云

ふ大きい處を頂く。

地

瀧川巴水

反對へ奉仕のかげの親の胸。

評 日系二世兵の奉仕に一世の親

の胸が察せられる。

人

関 五松

傳統の袖も捧げて國の爲。

評 大和撫子の誇る長い袖も切つ

て筒袖で御國の爲に工場働き。



五 客

病院に十六弗の優さ姿。

関 五松

爆彈の脅威も他所に救護班。

大山松賴生

世の爲めに我身忘れて流す汗。

井上二葉

世の爲めとなれば一途な母の靴。

速水白舟

謝禮する寸志あつさりあしらはれ。

吉里竜耳

十 秀

諸共に土國の爲と軍事工。

井上二葉

一日も善の一字へシヤワの味。

速水白舟

給料と別に奉仕を柵の中。

稲垣秋月

お手當と別な氣持の柵の汗。

龍川巴水

月給と別に奉仕の汗を拭き。

早川美貴子

劇場の美觀奉仕のあとを見せ。

稲垣秋月

苦心してメスは奉仕へ皿の数。

谷本晚香

女學生鋭後奉仕に車掌服。

鈴木縁松

人の口余所に奉仕の掃持ち。

稲垣牧東

赤誠がこつて奉仕に無我無中。

山内狂月

地の塩となつて奉仕の神の人。

巴水

同胞の奉仕高校落成し。

子守

公権を失。奉仕へ脈をとり。

晚天

ない思案編んで奉仕へ寄附の高。

白舟

信仰が有つて奉仕で世を助け。

天眠

民族の眞價歴史に血の奉仕。

牧東

先づ奉仕歸つて聞かう片手落。

同

民族の誇り奉仕に燃える意氣。

狂月

一億が心合せて大奉仕。

同

奉仕した徳の報いが今日の位置。

天眠

日曜日奉仕にそれた茶の薫り。

秋月

村中の奉仕で守る兵の家。

縁松

あいた地へ奉仕が見中る花の色。

かもめ

母の風邪末子小さい奉仕ぶり。

同

恩返しする氣奉仕の朝を起き。

美貴子

奉仕する心楽しい唄となり。

同

習字さす社會奉仕の坊の汗。

孫六

佳 句

誇らざる奉仕はいつも神々し。

峯月



手不足へ今日も奉仕の靴を穿き。軟葉  
マップ丈けすまし奉仕の顔を見せ。同

軸

手の刺も嬉し續ける奉仕汗。

次回句會課題

「春めく」

締切 三月廿日

「迂闊」

締切 三月廿日

互選

席題「意氣」

二月十四日句會

- |                   |    |
|-------------------|----|
| 5 夜の膳意氣投合の共稼ぎ。    | 時子 |
| 4 神風の意氣天を衝く比島戰。   | 緑線 |
| 4 再建へ壯者をしのぐ意氣構へ。  | 秋月 |
| 4 其意氣でやれと親友肩を打ち。  | 潮風 |
| 3 必勝へ總動員の揃ふ意氣。    | 秋月 |
| 3 意氣込みへ猫も手を引く大鼠。  | 緑線 |
| 3 意氣荒い坊やの握る五仙玉。   | 同  |
| 2 酒の意氣又遣り過ぎて後で詫び。 | 牧東 |

- |                       |    |
|-----------------------|----|
| 2 子が戦死してから父親の意氣が抜け。里江 |    |
| 2 昇天の意氣で征く子へうるむ母。     | 同  |
| 2 軍國の意氣頼もしい子の育ち。      | 時子 |
| 2 米の壽へまだく確と祖父の意氣。     | 秋月 |
| 2 聖業に意氣投合の決死隊。        | 緑線 |
| 1 酒の意氣何時か地金の箔がとれ。     | 胡仙 |
| 1 烈々の意氣を包んで配給衣。       | 同  |
| 1 黙忍の意氣を確かり肚へ据へ。      | 晩香 |
| 1 お互に笑ふて逝ふ君の爲め。       | 二葉 |
| 1 あの年齢で已れがくの父の意氣。     | 牧東 |
| 1 青年の意氣で出て行く友の顔。      | 里江 |
| 1 齡老へど志は開拓の意氣に燃え。時子   |    |
| 1 しつくりと折り目嬉しい妻の意氣。    | 五松 |
| 1 我が子をば飛行士にする父の意氣。    | 潮風 |
| 1 意氣丈けで威張れぬ齡を教へられ。同   |    |

互選

題「苦笑」

二日一日句會



- 6 弱点をつかれ苦笑へにげて居り。秋月  
 4 過去にふれ苦笑してゐる妻の前。同  
 4 見えすいた御世辞苦笑で軽く聞き。牧東  
 4 微苦笑で酒の氣焔を聞いて遣り。同  
 3 二日 醉見舞の客に苦笑ひ。緑松  
 2 教へ子の自慢話へ苦笑ひ。竜耳  
 2 苦笑して背水の陣煙草の輪。晚香  
 2 御互に吐の探り爲す苦笑。同  
 2 苦笑して其場を濁す釣天狗。二葉  
 2 何事も苦笑ですます賢夫人。同  
 1 噂主近づいて来た目に苦笑。秋月  
 1 横文字は一寸も讀めぬで苦笑ひ。緑松  
 1 憤怒をばぐつと押へて苦笑ひ。二葉  
 1 脱線を子が眞似てゐる明る朝。五松  
 1 御得意の手品の種を見つけられ。同  
 1 又名前見えぬ句箋に苦笑ひ。同  
 1 苦笑ひエイスの蔭に潜む謎。胡仙  
 1 片事に苦笑して祖父の顔。潮風

## 互 選

席題「協力」

二月十一日句會

- 6 朗らかに部落總出の杵の音。秋月  
 5 協力の偉大さ地圖の色を変へ。時子  
 4 協力が沙漠に實る畑の出来。光葉  
 3 柵を出て再起の圃に子も孫も。牧東  
 3 胸を打つ至誠の聲に揃ふ足。同  
 3 協力へ和む部落の笑ひ聲。同  
 3 協力のお蔭感謝のメスの卓。時子  
 3 協力へ聲ほがらかに朝を出す。秋月  
 2 協力の一億民を背負つて立ち。晚香  
 2 共稼ぎ北風寒き朝を出す。光葉  
 1 協力を惜まぬ時局皮膚の論。同  
 1 協力で沙漠も今は市と化し。二葉  
 1 大物も何時しか運ぶ蟻の群。同  
 1 協力の沙漠變つた町の色。五松  
 1 片方は妻が提げてゐるお米櫃。胡仙



1 難関も協力一致だ何のその。 時子  
 1 部落は現状維持へ協力し。 晩香  
 1 賛成へ両手を揚げた松葉杖。 潮風  
 1 御馳走になりに来た母エツプロン。 同

## 互選 席題「解決」

二月十一日句會

7 解決のついて月踏む軽い足。 秋月  
 6 解決がついて給仕を派出に呼び。 潮風  
 4 次ぎぐと難題さばく名議長。 里江  
 4 解決になやむ館府の閉鎖令。 五松  
 4 解決がつかないまゝの二世兵。 潮風  
 3 解決がついて握手で立ち別。 竜耳  
 3 夜が白む頃に話のけりがつき。 同  
 3 解決がつかず更けゆく議長席。 里江  
 3 解決へ重荷は下りた代表者。 同  
 3 解決のつかぬ加州の空模様。 五松

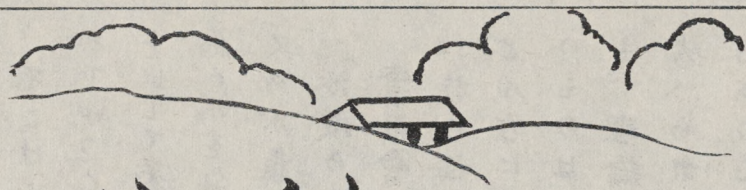
解決が着かず総出の夜が白み。 牧東  
 歩み寄り不仲の友も手を握り。 汀村  
 解決に力を盡す誠の友。 二葉  
 開放に身の解決を畑に生き。 緑松  
 解決のつかぬ一座へ茶を入れる。 秋月  
 解決へ煙草もいつかこなばかり。 潮風  
 屁理窟へお流れになるミイテング。 胡仙  
 解決へ二十五弗はチト安い。 時子  
 すまぬでは解けぬ心の昨日今日。 同  
 解決を望む現状閉鎖説。 汀村  
 解決のまだぐと出来ぬ人種僻。 同  
 誤解をばといて悦ぶ顔と顔。 二葉  
 前後策決まらず夜も更けて行き。 潮風

## 次回互選

宿題「底力」

次の句會は三月十一日(日曜)午後一時半ヨリ。ブラック十九ー十三ーDにて。





# 創作

老人と水に船

林文幸盛

彼の死

眞澄丘

なごり

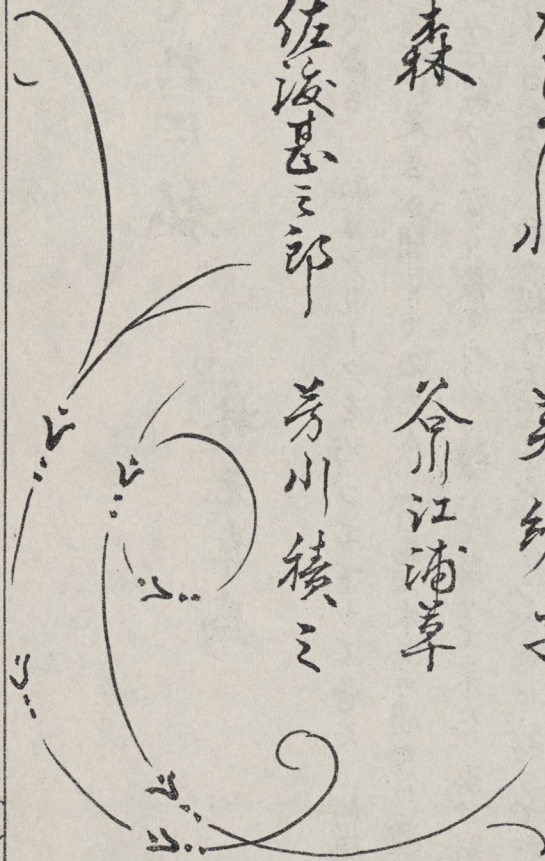
美紗子

森

谷江浦草

佐渡甚三郎

芳川積三







# 老人とそれに私

林元幸盛

そこは山間の小平地になつてゐる。私はクリークを沿つて下つて居た。何處かでやつくり歩いてゐる馬の重たい足音が聞えてゐたが、野馬が木立の間から顔を出して来た。クリークの水を飲みに残つとなく後からく續いて降りて来た。私は野馬が水を飲む様をぼうつと眺めてゐたら、向の堤の上でインデアンが馬に跨つて行くのが氣に付いた。が、暫くして濛々と土埃を上げて馬を飛ばすのが見えた。

「沙漠の自然児！」私は、それを限りなく優しく見送つた。

實社會から遠く離れたモハベ保護地。私は特にさう呼んでゐた。その昔モハベ族の住んでゐたと言ふインデアン保護地なのだ。それはインデアンにとつてどんなに平和な村であつたらう。アメリカの繪に畫いてある鳥の羽をつけた頭のものとも早やつけてゐないが、日に焼けた一様に純な顔である。彼等は學問も、理論も、政治も、何も知らないけれどもとりわけ馬鹿になつてゐるやうにも考へられない。利口さを知らないおかげで人の悪だくみも、うらないでゐるとでも云つた種類なのか、天真さを差別なく供へ持つてゐる。原始時代を目の前に



想像するとしても今の自分のやうに實社會にまみれて加州を逐はれて来た人間とは比較にならないやうな、清らかな心を蓄へてゐるやうに暖い目を持つてゐる。彼等はこゝの沙漠をつき抜けた太古の昔から流れるコロラド河の悠久さの前にすっかり洗練された人間なのであらう。そのあひら家は貪しいと云ふよりか古時の面影を家屋にとどめてゐると言つた方が正しいやうに見える。そして恐らくはこのまゝ持つて生れた清純な姿で人間の一生を終るのであらう。私は彼等の生活に哀愁とそれに愛着とを感じる。開墾不可能な沙漠の天地を與へられてさゝやかに綿を作つてゐる彼等を世界の誰よりもいとしく思つた。静かな生活である。彼等が飾り氣なく、朴訥で、さり氣なく過してゐるといふことは何よりも強烈な夏の暑さに叩かれて猶彼等の民族が亡びずに生存した経験の歴史であらう。弓矢を捨てた時代からどの位時代が経つたものだらう。又しても彼等には尊い一片の愛惜を感じる。それと同時に、收容されてゐる自分達が彼等の目に如何に寫つたかを考へ馬鹿々々しくすまされないものを感じた。

私は小高い砂丘の上に立つた。私は遙か地平線の彼方に家や野や埋もれた未来があるべき筈を思つた。午前十時の陽ざしが空想的な町を野を悲しむ世界の中から救ふべく紙潔に輝いてゐる。林の若葉の冷たさは依然として身に染々と感じさせられて鬱勃なる元氣が出た。恰も森の中に始終調子高い生活が待つてゐるかのやうに――。



クリークの淵に糸の樹とこの國に生えてゐたのが鳥渡めづらしく思はれた揚柳とがそこかしこなく茂つてゐた。そして猶よくその一本の揚柳の下影では見知らぬ老人が釣糸を垂れてゐた。老人は始終下をむいて釣つてゐたらしく背も自然と丸くすばめ肩になつてゐた。堤の上から私は「釣れますかね」と、聲をかけた。老人はふいに驚いたらしく周章振り返つたが、私を見上げたまゝの目が段々軟らかみを帯びて来た。私は老人のゐる足場のわきにそろつと並んだ。魚はどれも釣れてゐないらしかつた。

「まだ魚を釣るには早いのぢやないか知ら。冬が明けたばかりだから。」と言つた。  
「一番彙りに釣つてブラックに歸らうと思つてね。一匹でも釣つて歸つたら魚が食ひ出したと思つて皆んな河へ飛び出して来るからね。かうした山河の春の香を皆んなに一日も早く吸はしてやりたいね。」

「をぢさん、春が好きかね。」

「あゝ、一等好きだよ。どうも自由が利かないと——。」

「自由が利かないと……。」と言つて、私も急に口をつぐむだ。

「をぢさん何ちらからお出でかね。」

「ブラックかね？」

「いゝえ、お家御よ。」

「サリナスに居たさ。」



「サリナス！。僕もさうよ。」

と言つて、浮標<sup>ウキ</sup>を見詰めたまゝ、

「ついでお見かけした事がなかつた。」と、呟い。

「あんたは御存じ有りませんよ。縁のない社会<sup>シャカイ</sup>だったから。労働キャンプで移民の残存のつまり最後をつとめたのですよ。」

私は次の言葉が続けられなかつた。私は老人の身装をそつと盗み見た。魚釣りに来たのだから一様には言へなかつたが、洗濯のゆきとどいてゐない垢の着いた着物であつた。老人の皺だらけの顔を見たとき何となくいとしい氣持が湧いた。若い時カデ屋の重たいツチを打ち振つた事でもありさうな武骨張つた肩が、肉の落ちた身體のどこかに感じられたからである。老人が動く時はミソサバイが来る時のやうに絶えずあちこち動いた。河面を見てゐた私は老人が竿を土堤に立てゝ小用をしに藪の方へ行つたときも意識の中に感じてゐた。私はまだ老人の名前も知らなかつた。だが、通常かうした場合知らない方が自然の慣例のやうな氣がした。その間、静かに私は老人が反身<sup>ソリミ</sup>になつて鳥渡した小坂になつた。私がたつた今下りて来た堤を上つて行つたさまを考へてゐた。聴て老人が古いキヤップを頭に被つて墨國人のカウボーイの様に、首に巻いた薄汚いハンカチのはしをひらく／＼させながら土堤の後から現れたとき、浮標がびくびく動いた。私は二つの手を差し伸べて魚竿を持ち上げた。



「大きいのが釣れた！」

「何かね。」

「鯉よ。」

「魚には護衛の軍艦がないものと見えて易々と我が物になる。ハ、ハ、ハッ。」と、老人は身體を樂しさうにゆすつた。そして巢をうけ取ると巢籠に入れて河の中へ浸した。それから、老人はついでにヨレ／＼のハンカチを首からほどいて水で洗つた。それを、一すゝぎすると後のセイジブラッシの枝にひっかけた。その間、私は年寄つた人の動作を一つ／＼見守つてゐて微笑した。私は鉤に餌をつけて、何か寂しくなつた。老人はあまりにも恵まれない過去を持つてゐるらしく思はれた。

「冬の間は寒いからお困りでせう。」

「困るやうなこともないね。炭を作るから。」

「さう。私の親父もよう炭焼きに來ましたから、どこかこの邊の奥に。」

「御両親と一緒にね。そりやい、ね。」

私は急に元氣づいて、「え、小父さん息子さんあるの」と言つた。その時の

私はこの老人にも私位の息子があるに違ひないと思つた。すると、

「いや無いさ。子に食はせてもらふ頃になると子はすぐ外部へ飛び出したりして親の傍なんか仲々ゐないんだから。」と答へた。私は目の前三尺が何だかゆらゆら揺めいた様な氣がした。其次に老人は余りにも意外な事を言つたのである。



「魚を釣つてゐると故郷の兄を思ひ出すのさ。」

今度は私が、「兄さんとこちらに御一緒ぢやなかつたんですか？」と、訊いた。

「妻はないが、兄がある。」

「それでは戦争が早く済むといふね。」

「飛んで歸るさ。だが、日本に歸れて居たらよかつたがね。さうぢやないですか。」と、言つた。

私は老人の顔をしみぐと見て黙つてゐた。すると老人は、「戦争があつてみて、はじめて日本へ歸らうと思ふ機會を早めた丈の事だから。」と、付け加へた。

「私は歸るには歸れない理由があつたんですよ。長い間家が非常に貧しくつてね。それももとからさうではなかつたんだがね。」

さう言つて、今度は、土堤にさしてある魚竿を持ち上げて、

「うちは昔庄屋もした事のある家で、私等が来る頃迄は相當裕福に暮してゐたのさ。それも、あんた達の目から見れば、ひどく煤けた貧乏臭い家かも知れないがね。やつとそれ丈でもとり戻せたと兄貴から通知があつた譯さ。」と、言つた。

「私等が兄弟してこちらで嫁いでゐた金で、やつとこさ借財を拂つて家が残つたのだ。故郷の父がある事で破産し兄貴を歸してやつた。そりや親を見たり親父の財産の整理をするのは兄貴の役目だからね。その爲に、私はこちらで嫁いだ金を全部兄貴に送つてやつた。ほとんど三十年近く。だが、思へば可哀さうなのは兄貴の方さ。兄貴はお隣で古郷に一生埋もれたかたちになつたので氣



の毒でならない。」と、言つた。

私は、思ひ出し／＼言ふ老人の言葉を一つ／＼うなづいて聞いてゐた。一つでも老人の氣持を暗くしたくなかつた。そして、かすかではあつたが自分には悦びが湧いた。

やがて老人は川下の池に行つて試みて見やうかとのめかした。私も池の方は廣くもつと魚がまとまつてゐさうで老人を欣ばせるに違ひないと思つたから賛意した。さうするには私が此處に居ては老人も遠慮して立ち去りかねるに違ひない。さう思つたので私は立ち上つて別れを告げた。

私がさつきの小高い丘に来て老人の方を振り返つたとき、老人が川下の方へ魚竿を擔いで下つて行く小さな姿を認めた。

老人の姿はそれつきり見えなくなつた。私は暫くの間砂丘の上に呆然として立つてゐた。老人の過去凡らく四十年に近い移民生活はかうして誰にも知られずに埋もれやうとしてゐる。あゝ、美しいと思つたからである。移民の子である自分は移民の生活の眞實を味つた丈で充分の幸福とすべきである。そして移民の子である自分は今の老人に言はねばならない大切な事を忘れてゐたと思つた。が、今はもう仕方がない。自分がかう言ふ美しい人達を無遠慮に收容所に叩き込んだ人々を今更考へたことではないと思つた。

太陽と共に收容所の同じ圓ひのなかで生活する人々が、美しい人間の歴史を持ち永遠の土の果てに消えて行くことを淋しいまでに味つた。(終)





## 彼の死

真澄 丘

(一) 兇行

「君、今の問題は皆出来たか。」自信を失つてゐる木村が肩をならべて教室を出た吉田に問ひかけた。「あの大罌丸の奴馬鹿にむづかしい問題はかり出しやがって、半分しか出来やしない……」短氣な吉田は臨時試験のあつた代數答案の不本意から先生の名を「大罌丸」と呼ぶことによつてせめてもの當座の腹をいやしてゐる。時は十月十日の午前十一時三十五分、學校内の食堂にパン屋が焼きたてのパンを大八車で運ぶ頃、そして生徒達は一齊に空腹から感ずる嗅覺をこのパン屋の運ぶパンにそゝられてゐた。

丁度その時ヒョウキンな聲を出した吉田が目を据えて、「オイ大変だ。ヤ……ワツ……斬られた……」ととりとめもつかない言葉に校庭に吐出される生徒達は、斯ふなると校則もヘチマもあつたものではない。幾十人かの生徒達は一目散に校門を隔て、二十間程の真向合せの朽ちた市立商業學校の校舎裏に馳せ集つた。白晝しかもそこは廣嶋市街の真唯中、そして昭和の今、目前に演ぜられてゐるのは恐るべき人殺しの大兇行であるのだ。関の聲を作つて走り集る一群の生徒……そこには紅の血に凍つてストーリートの真中に倒されてゐる四年生の



矢木登が、中學校のユニホームを身につけ石膏の様に蒼ざめて俯せに倒れてゐる。教頭の玉村先生が自責と驚駭の念に興奮し切つた面もちで、巾の廣い口髷を不規則にピクつかせながら、「矢木か矢木!! どうしたと言ふんだ、この惨らしい姿は?.....」

救急車が西練兵場の方向から人通りの中をケタタましい非常ベルをつゞけさまにかき立て乍ら飛んで来る。警察署員がモーターサイクルを飛ばしてくる。みる／＼人の山だ。右肺から背筋へ、そして心臓を深く斜はすかにえぐられたこの痛ましい登少年の重傷は、誰が見てもすぐ背後から暗討ちされたことをうなづかせてゐる。

制服の小倉服がベツトリと血に混つてその服の切れ目から新しい出立ての血液が泌み出てゐる。押し開いて見ると肺臓と心臓とが雨つ乍ら露出して時計の裏金を取りはづした様に、唯吐息する丈けで判然としたことを言ふ者は一人もゐない。凡ての犯行を謎に秘めて、今瀕死の登少年を乗せた救急車は一路、内海病院に運ばれて行つた。

### (二) 談 別

雨と太陽が合作した病院の看板が化學的変化によつて浮彫されてゐる。「内海外科病院」とある文字を左に見て門を入ると、にはかに鼻をつく消毒藥の匂ひ、白衣の看護婦さんの急ぎ足、そして沈痛な來訪者の面持、斯した零團氣を作つてゐる凡ての中心こそは第五十三歸の特別一等室、即ち登少年の運びこまれ



た病室からである。

「判るかいなア登や、苦しいはネ……」土の様に色纏せた吾が児の顔を涙にうるむ眼で眺め乍ら訴へる様に言つてゐるのは母基子さんである。

兎行即座、血液の飛沫が登の頸に飛び散つて錆色に變つてゐる血液を視つめて副院長の辻村博士は、まばたきもせず動脈の動行に全神経を傾注し、そして今の瞬間の状勢から醫學的判断を正しく下さうといふ醫學の良心が博士の全身をとりかこんでゐる。暫くして、「輸血!!」これが最後の輸血です。登と同型の血液A型は、これも因縁因果か登の家庭教師である由村太郎の提供したものである。大きなガラス管から今絶望的な登の心臓の中に徐に注ぎ込まれてゆく。

登の父も母もそして由村太郎も親類縁者の人達も、息詰る様な思ひの中に副院長の次の表情と、どんな言葉か口をついて出るか、唯それのみを待ち詫びてゐる。一秒又一秒、神秘的な人體に神學の人為的反應が現出する。「オ、目を開けた。」父の奥四郎は思はず一瞬の悦びと悲しみの中から自分を忘れた様な心地でかう言つた。然し辻村博士は何等の表情をも現はさず、看護婦の野澤もチラリと博士のプロフィールを見ただけで、全く兩人の態度には何の異常も認められない。目を開いた登は次に口をモグ／＼動かし始めた。そして数秒後彼は今漸く昏睡の夢魔からしばし解放されたのである。母の基子も悲しみの中から一縷の望みに微笑をたゞえてゐる。由村は得意の面持で見入つてゐる。すべてがこの世の名残の一ときである。



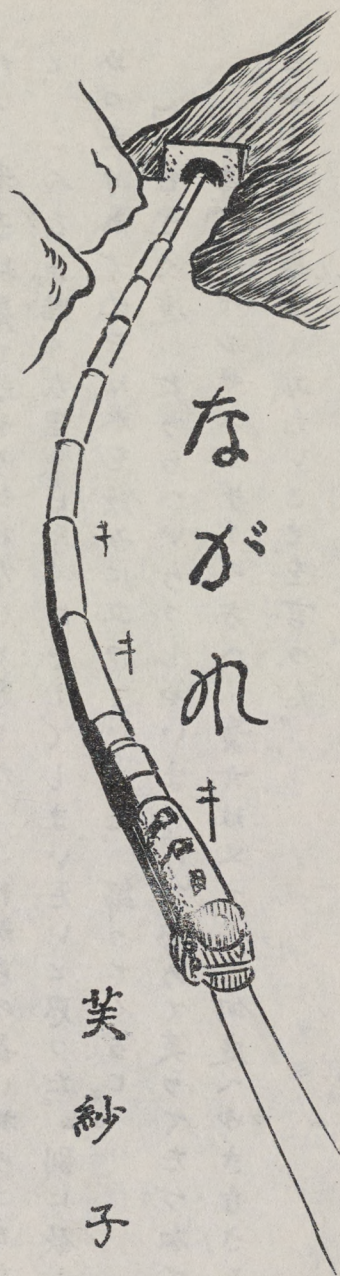
「お母さん、由村先生すみません……」 息は痛はしい程重苦しく感ぜられる。

「お母さん許して下さい今日までの不幸を……十七年の間、親の言附けも聞かず学校へ入っても不勉強で先生からも見逃されてゐたこの私が今日はお別れする日が来しました。僕は人まちがひで殺されたのです。僕が血にまみれて倒れるとき僕をきりつけた〇〇商業の彼は『しまった君!! 許してくれー人まちがひだ。ゆるしてくれ!!』それだけ言つて逃げ去りました。僕はよいことをしたのです。不良の私が斯うして殺されねばならぬ人の爲に、今死んでゆくことはせめての僕の仕合せです……お父さんあの商業学校の生徒をこれ以上責めないで下さい。 たつた一人の息子を殺した悪い奴ぢあと、うらまずにゐて下さい。最期の僕の願ひです。どうぞあの人をゆるして下さい。前途を明るくしてあげて下さい。」これだけの言葉も呂律の廻り兼ねる今の登の口からは生汗の出る程の力一杯の努力である。一息深い呼吸をした彼は頭をやをら動かして、

「お母さん、由村先生、僕は生れるのです。僕の心の奥から今まで蔽はれてゐたすべてのものがはつきりと僕の心に表れて浮んできます……もう……」。

登は段々と混沌となつてゆく意識の底で「お、氣持よい瞬間だ浮雲にのせられた様だ」と思つた瞬間、今は破られて一切の活動を中止してゐる見苦しい己が肺臓や心臓をかなぐり捨て、フアリ／＼と飛んでゆく様な氣がし出した。辻村博士は静かに聴診器を耳から取りのけた。そして「お氣のすですがこれ迄です。一族の悲しい鳴咽の中を抜け出る様にして博士は出て行つた。(終)





バスが左方に迂回したところで、もう一度キャンプの灯が視野にかへつてきた。光子は何處かでこんな風景を見たことがあるやうに思った。

コロラド河を越えた向ふの山の上はまだ全く暮れきらぬデイライトを反かに残してゐた。今になつて腹の底から甘酸っぱい悲哀のやうなものがごくごくんとこみ上げて来た。見送りにきてくれてゐた人達の顔がまだ今も目に見えてゐる。老ひた母の顔も、初い妹達の顔も泣いてゐたが、光子には一滴の涙も出てこなかつた。

寒い風が空を渡つてゐる。ステーションについてからもつと激しく吹き出したやうである。

發車までにはまだ大分時間がある。待合室を覗いて見たが、狭い土間のやうなルームには一杯人がゐた。その人達の胸には皆、何か抱負のやうなものでもあるのだらうか。ふつとそんなことも考へてみる。



星が一つ飛んだ。風がひどいので貨車の蔭に身をよせて立つてゐた。光子はぼんやり、空漠とした明日をあさつてを人事のやうに考へてみた。

「ガヤ／＼と人の聲がして待合室から皆が出てきた。時間が来たのだらう。光子も人渡の方へ歩いていった。」

車室は混雑してゐた。光子は隅の窓際に席を取った。前のシートには中年の夫婦らしい人が来た。暫くざわついてゐたが、そのうち静かになつてきた。皆思ひ思ひの席についたのであらう。光子の隣席には誰もこなかつた。これならば樂に旅が出来るだらうと思つてホッとした。誰か知つてゐる人が居るか知らと思つて見廻したが誰も知つた人は居なかつた。けれど、どの顔も／＼一度や二度は何處かで見たことがあるやうに思へた。

前の夫人が時折、詮索するやうな視線を向けてくる。これも陰氣な日本人の一つの性向だと思つた。そつぽを向いて意中に無いやうに虚勢を張つて見るものゝ、光子は是ではやり切れないと思つた。これからの長い旅のことを考へると、こんな氣詰りな空氣は早くほぐしてしまいたいと思つた。別に欲しくはなかつたけれど光子は水を飲みに立つていった。歸つてくると、

「おばさん達、どちらへいらっしやいますの。」努めて笑つてたづねてみた。

「私達はキャンサスシティの方へ、貴女は又一人で何處へゆきなさる。」夫人はやうやく尋ねてみたいことを言つた。



夜が更けてみんな眠つてしまった。疲れてゐるので少し眠らうと思つて後に凭れて目をつぶつてゐたが何時までも眠れなかつた。機関の音だけが、まるで汽車の呼吸のやうに神経的に響いてきて、動悸が激しく打つてゐた。どんな所を走つてゐるのだらうか。窓の外を見ると、灯一つ見えない。地殻が大きな真黒い口を開いて轟々うなつてゐるやうにも思へた。そして其の中へ自分一人だけがぐん／＼吸ひこまれてゆくやうな心細い思ひがした。こんな淋しい旅をするのは自分一人のやうにも思へた。微かな鼾も聞えてくる。

かうして心では岩上の跡を追つてゆく自分に、光子は精一杯言ひ分けをしてゐた。どんなに自分が岩上を戀ひしいからと言つて、彼とどうにもなれるものでないことをよく知つてゐながら、かうして父の心に叛いてまで出て来た自分はやはり岩上との間に何かを期待してゐるのではあるまいかとも思つた。

灯が少し散在してゐるのが見えてきた。小さな田舎の町を通つてゐるのであらうが汽車は停らなかつた。

光子は松田秀樹や岩上と別れてからの一年余りの意味のない淋しい生活を想ひ出す。

松田秀樹のツールレーキ行きが決つた時、當然婚約してゐる光子は自分に踵いてくるものだと思つてゐた。

その頃から秀樹はしきりに民族意識を強調し、アメリカの政策の誤謬を指摘



してひどく雄辯で居た。二人はよく議論をした。光子にも秀樹の言ふことが分らないではなかつたけれど、秀樹がどんなに一生懸命に引きづつてゆかうとしても、日本を知らない光子にはどんなに背のびしてみても彼の思想について申けないものがあつた。

「○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○」光子は何時もそんな時鼻の先でふふんと笑つて聞いてゐるのであつた。すると決つて秀樹は怒り出した。

そのうち秀樹はいつか光子の家をおとなはなくなつてきた。

四日たつても、五日たつても彼はやつてこなかつた。

光子は少し焦々してきた。一週間余りたつてとう／＼秀樹を訪ねていった。彼は硬い表情をし、それでもすぐに柔げてこゝろよく迎へてくれたが、秀樹の顔を見た時、光子は急に二人の間に遠い距離の出来てしまったことを感じた。煙草の煙を天井にばかり吹きかけてゐる彼に、

「ね、私もツールレーキに行かうか知ら。」ふつとやるせない氣持になつてそんなことを言つた。光子ははじめて熱い想ひがずーんと中樞を昇つてゆくのを感じた。

若し秀樹が喜んでくれてゐたら、彼について行つてゐたことだらうが、

「どうも、君といふ女は僕にはえう過ぎるからな！」

彼は突つ救すやうに言つた。



光子は激しい屈辱を覚えた。

黙つて歸つてゆく光子の胸の中には悲しみが一杯に詰つてゐた。それから幾日、光子は初めて眞剣に秀樹との問題を考へてみた。彼が何故アメリカに來たかも分つてゐたし、今となつては結局還つてゆかなければならないことは決つてゐた。同じ。。。てるならば彼としては今後が中かうとしてゐる道が當然よく可き道であつたらう。感應性強い青年時代は思想も社會の趨勢につれて動いてゆくであらう。光子の中にも彼と同じ思ひがないではなかつた。けれど光子達のやうな場合には、日本民族の名を恥かしめぬ爲には、よきアメリカ市民として生きてゆくより他にはないと思ふのであつた。

二人の間を裂いていうたものが決して思想的なもので無いことを光子は今では判然と知ってゐる。秀樹を想ひ出す度に光子は決して心の中で詭言を言ふのであつた。

其の婚約が自然の成行であつたとは言へ、別に愛情を抱いてゐない秀樹とエ  
ンゲージしてしまつたといふ事は普通の人達と同じやうに、結婚を社會の慣例  
に對する軽い一つの義務のやうにしか考へてゐなかつた。二十四五にもなると  
何かせき立てられるやうな氣持になつてきて、それから後は一年一年、何か取  
り残されてゆくやうなわびしさを知るやうになつてくるのであつた。

眠られぬ夜が明けた。

名も分らない驛に汽車は何をするのかよく停った。時には忘れられたのでは



ないかと思ふ程長い間止つてゐる事もあつた。寒い小雨がしよぼ／＼石のステーションを濡らしてゐた。其處うに人一人見えないうちの一層わびしく心細かつた。前のおばさんはよく何かと質問した。退屈でもあるので調子を合はせてゐることもあつたけれど、うるさくなると光子は後に頭を凭せて寝た振をしてゐた。すつかり汽車には倦怠してきた。

背筋の方がずきん／＼と痛んでやり切れなかつた。

後のシートに坐つてゐるおぢさん達はよく話した。三人のうち一人はまだ四十前位に見うけられたが、大低居眠りばかりしてゐた。赫銅色をした小さいおぢいさんは、白い歯を出して吃驚する程よくしゃべつた。大方は戦争の話ばかりでひどく景氣がよかつた。○○○の竹槍隊も嬉しいらしかつた。そこには毫も科學的判断を必要とはしなかつた。前にはキャンプでも廻つてゐたのであらう。耳珍らしい話を、聲高にしゃべつてゐる事もあつた。よく酒の話もした。

「もう年を取るものう、女より、酒徳利を抱いてゐる方がいゝんでのう。」大聲で言つて二人のおぢいさんは「ハハハハ………」と笑つた。

近くのシートに居る人達も笑つてゐた。

光子は耳朶まで真赤になつた。恥かしさがスーと身體を走つていつた。

こんな人達が外に出て外人の社會にはいつてどんな生活をするのだらうかと思ふと、淋しくなつてきた。



倦々としてきて棚から小型のスーツケースを下すと、ダイジエストラヴェと地図を出した。地図をひろげて、今走つてゐると思へる所點にマークをつけて見る。随分遠く離れてきたものだと思ひがした。急に母や父が懐しくなつてきた。

父はどうしてもキャンプに籠城するのだと言つてきかなかつた。父としては無理のないことだと光子は思った。永い間に築いて来た事業を其の儘放り出してきた父は三年間の安易なキャンプ生活の中ですっかり消極的になつてしまつてゐた。年老ひてしまつた父としては今、外部に出てゆくには皆と同じやうに住家の不安の上に、もう一つ仕事への不安があつた。其の上に日本人の家屋を焼かれたり、狙撃されたりするやうな不當な排斥があるといふことは、たつた一人の息子をフランスの戦線に送つてゐる父としては忍べないことであらう。父は父でそれでいゝと光子は思った。考へて見たところでもならないこととで有つた。思へば誰も彼も多様な角度を持つた思想の中に居るのであつた。渺茫とした草原は牧場にでもなつてゐるのであらうか。鐵道の近くでは、降るやうな太陽を浴びて牛が五六匹草をはんでゐる。向ふに大きな農家が一軒見える。光子はかうした平和な描畫の中にも戦争の波は打ちよせてゐるであらうかと思ふ。

向ふ隣のシートには子供の三人ある家族がゐた。子供達はすっかり疲れきつ



てゐた。下の四ツ位の女の子は、よく『汽車からおんりしやうよ』と言って泣いてゐた。ひどく機嫌を損じるとフロアにねころんで足をバタ／＼させておれ  
てゐることがあった。母親はもう困りきつて手のつけやうがないといふやうに  
知らん顔してゐることがあった。今その子はうたゝねから覺めてぼんやり坐つ  
てゐる。光子が微笑ふと暫くしてから下りてきた。光子はスウィーツから便  
箋を出して紙風船をつくつてやった。

幾日たつても、車内の人達とは口をきくこともなかった。おせっかいなキヤ  
ンプの生活を思ふと此の他所／＼しい空氣は何故だらうかと考へて見る。

晝前になつて豫定よりおくれて、漸く煤によごれた工業都市シカゴの街につ  
いた。電報を打つておいたので友達が迎へに出てゐてくれた。光子は友達の恵  
子と一緒にアパートに住んだ。久振りに味はふ都會の生活も珍らしく、幸に得  
たファッションアートの仕事も面白かった。光子の繪も思ひがけなくよく認められ  
た。あんなに慕つてきた岩上には三ヶ月経つてもまだ會ひにはいつてゐなかつた。

十時頃になつて目が覺めた。日曜日だといふのに、恵子は何處にいつたのか  
居なかつた。寢床も綺麗に作つてあつた。洗面所かと思つたが恵子は何時まで  
経つても歸つてこなかつた。窓を覗くと今朝も空はどんよりと濁つてゐる。ア  
リゾナの輝くやうな空を懐かしく思ひ浮かべた。又寢床の中にもぐりこむ。



静かな日曜日！・日曜日は光子はかへつて寂しかった。急に恵子の若さが羨ましくなってくる。何時のまに自分はこのなぎち／＼したるほひのない女になつてしまつたのだらうかと思ふ。今日はどうしても岩上に逢ひにゆかうと思つた。きまつて此の日曜日にはきつと會ひにゆかうと思ふのだけれど、其の日になると、いつも逡巡して一日を呆んやり過してしまふのであつた。感情が昂つて苦痛になつてくるとちつと唇を噛みしめて蒼い顔をして目をギラ／＼させて立つてゐた。何時かそんな姿を鏡の中に見出して叱驚りしたことがある。

前から知らないわけではなかつたけれど、彼と親しくなつたのはキャンブにいつてから偶然同じ職場で事務をとるやうになつてからであつた。風采も立派であつたけれど、何時もきちんとして清潔な感じのする男であつた。彼には日本に妻がゐた。子供はなかつたけれど、結婚生活十年の間、二度ばかり日本に歸つたきりで殆ど一緒には生活してゐなかつた。光子はかうした変態な生活に軽い好奇心を持つてみてゐた。

胸に通ふ熱いものをそつとみつめて一年を岩上と同じ職場で働いてきた。岩上に對する激しい情熱が時には光子を盲目にしなないではおかないやうな衝動にかり立てゝゆくこともあつた。岩上の氣持は光子には分らなかつた。唯彼の示してくれる親切を、時折同室の人にからかはれることがあつた。それから前から決つてゐた秀樹との婚約を知つた岩上は間もなくシカゴに發つていった。



「お便りを下さるはね」と言つた光子に、「僕は心で毎日便りを書きます。」といつて硬く手を握つてくれた。

それから一年半、苦しんで苦しんで悶えぬいて。たつたそれだけの男の言葉を頼りにとう／＼此處まで男の後を追つてきた自分を、人事のやうに哀れに思つてみるのであつた。

x

x

一時間余り電車にゆられて光子は岩上のアパートに行つた。岩上は暫くきよとんとして物も言はないで立つてゐた。信じられないといふやうな表情である仕方なく光子は三ヶ月も前にきて、今友達のアパートにゐることを要領悪く急いでしゃべつた。

部屋にはいつてから「真直ぐ此處にすればよかつたのに。」岩上は抑へるやうな低い聲で言つた。

歸りの電車から下りて、光子は人通りであることも思はず、熱い湯のやうな涙をハラ／＼と流してゐた。それは嬉しいのか悲しいのか分らないやうな涙であつた。もうどうでもいゝといふ捨鉢な氣持になつてくるのであつた。此處まできてしまった奔流を光子はどうにも出来はしなないと思ふのであつた。

古びたアパートの階段を上りながら、明日は人を頼んでこのアパートに引越してゆかうと思ふのであつた。

(一九四五、二、一九)





# 木林

## 心川江浦草

こんなこと——今ではずいぶんと遠い昔話になりましたわ。でもまあお望みでしたらお話申し上げませう。ホンのつまらない繰り言だと思召してお聞き下さいませ。

ええ、さうですわ……プロフェッソル・タカタが私の家へいらしたのは忘れもいたしません、確か一九二一年の秋の初めころでした。さうく申上げるのを忘れてゐましたが、その頃私たちの一家はライン河に沿ったケエルの町——あの佛領ストラスブールの對岸にある小さなケエルの町を引揚げて、矢張りそこから四〇哩程ラインに沿つて南に上つたところにある、フライブルク郊外の静かな森の家に移り住んだばかりでした。父はズット前に亡くなつて母と私達三人姉妹の淋しい家庭でしたが、つましい生活さへ續ける限り父の残した僅かばかりの遺産でその日くを暮らしてゆくにはことゝ飲かないのでした。家は前のケエルの時と違つて私達には勿體ない位ひ大きく、見晴しのよい丘陵の中腹に建つてをりました。

丘陵と申し上げましたが、御承知の様に獨逸では殖林が大変よく行はれてゐ



まして山と云ふ山、丘と云ふ丘はすべて手入れのよく行き届いた森林になつてをります。それで他國で言へば何々山とか、何々丘とか言ふところを獨逸では何々森ワグネルと呼ぶ様なことが多いのでございます。私どものをりましたフライブルグはあの有名なシェワルト・ワルト（黒林）の一部みたいなものでしたから、家もあの邊一帯に多い樺や檜に鬱蒼とかこまれてゐました。

「ねえ、お母さん」獨逸の文化は森より出づつて詩人も歌ひましたけれどそれほんたうですわね。私たちこゝに来て何かしらインシュピラティオンみたいなものを受けるやうな氣がしますわね。などゝ生意氣なことを言つては妹達と無性に喜んでゐたものでした。

さうした頃かねて御懇意に願つてゐる大學のハイデガーさんから、フサール先生の許に遙々日本より勉強にお出でになる學生さん——と言つても日本の大學助教だとか伺ひましたが——を暫らく御世話してはもらへないだらうかと言ふ御依頼がございました。家も廣いことですし、さうした方に來て頂ければ家庭も賑やかになるだらうからと言ふので皆んなで相談してお受けすることにいたしました。ハイデガーさん——今では誰一人知らぬものもない程の偉い哲學者にお成りですがその頃はまだお若くて、とてもきさくない、方でございますでした。そのハイデガーさんから今度いらつしやる日本の方は夙ソクにフサール先生とも文通に依つて親交のある方で、將來は東洋の哲學界を主ツク負つて立たれる方だとお伺ひして母もいゝ方がいらして下さるわねつてとても喜んでをりました



の。フライブルクの誇り否、獨逸の誇りである世界に並びない偉大な哲學者フ  
サル先生の許へ遠い／＼日本から勉強にいらつしやる方うてどんな方かしら  
……「哲學者うて言ふから毎日々々御本ばかり見　らして、私たちとは話なそ  
少しもして下さらないやうな方ぢやないかしら。あらそんなことないわ、フサ  
ール先生のお弟子さん達を御覧なさいな、どの方ともみんないゝ方ばかりぢやあ  
りませんか、きつとその方もいゝ方にきまつてゐますわ。私達姉妹は乙女心の  
胸もふくらむ思ひで夕餉の一刻、未だ見ぬ東邦からの御客様へはてしない空想  
の翼を伸ばすのでした。まだ申上げてゐなかつたと思ひますが私はその頃ギム  
ナジウム（大學豫備校）へ入つたばかりで、二つ宛違ひの妹達はそれ／＼中  
等學校へ通つてをりました。

その日は丁度日曜の午後だつたか何かで、私達三人はサンルームで爽やかな  
初秋の陽ざしを心ゆくばかり楽しんでをりました。空には真綿のやうな柔い雲が  
浮び、白銀シロガネをのべたラインの流れが遠い佛蘭西國境の山々に沿つてゆるやかに  
流れてゐたのを今でも忘れることが出来ません。

「みんなこちらへお出で！　プロフェッソル・タカタがお見えになりましたよ。」  
母の呼び聲に私たちは目白押しにならんで客間へ入つて行きました。

日本の方——實を言ふと私たちは東洋の方にお目にかゝるのはこれが初めて  
なのでした。私たちが入つて行くと丁度眞正面の爐の左側に、入口の方を向い  
て座つてゐらした若い方がツイと椅子より身をおこして、ニコ／＼しながら私



達の前に進んでいらつしやいました。小麥色に輝く健康そのものゝ面ざし、深き叡智をたゞへた様な黒い双瞳、鼠色の服、臘脂<sup>エンジ</sup>色のネクタイ——さういつたものの断片的印象が一時にドット私の中のにとび込んで参りました。「こちらは日本からお見へになったプロフェッソル・ヘル・タカタ」「こちらは娘等でございます。」母の紹介の言葉に一々にこやかに頷きながらタカタさんは私達に握手の手を差延べました。そして思つたよりも正確な獨逸語で「これから暫らくお世話になります。どうぞよろしく」と仰言ひました。

かうして一通り私たちの引合せが済むと話は又もとの續きに歸つて行くやうでした。話は何でもこの街が如何に美しく又住みよい所であるかと言つたやうなことで、時々ハイデガーさんがジョークをとばして皆んなを笑はせました。その中に、私達姉妹はいつしか話の圈外に置き去られたかたちで、母と二人のお客さんの雄辯(?)をジツと拜聴させられてゐるばかりでした。

「Er spricht deutsch, als ob er ein Deutscher wäre.  
(あの方、獨逸語はまるで獨逸人みたいにお上手ね)」私は横にかけて退屈しきつてゐる次の妹にソツと話しかけました。すると妹が返事をするかしない中にタカタさんが急に私の方を向いて「有<sup>ダシケシ</sup>がたう。」つて仰言ひましたので私は思はず大聲で「アラ、聞えたんだワ」つて言つたものですから皆んなにドツと笑はれてしまいました。

それから又こんなこともございました。これはタカタさん いらして間もな



くだったと思ひますが——ある夕方のことでした。その日は妹達はゐなかつたものとみへて私獨り食後の散歩に前の森へ入つて行きました。落葉を踏んでだん／＼奥の方へ入つて行きますと、どうでせう遠くの方からウル、と云ふ何とも言へない変な音響が聞へてくるではありませんか。人の聲みたいでもあつたし何かしらと思つてなほもコワ／＼近づいて行きますと、どうでせう大きな切株に向むきに腰かけて変な聲を連發してゐるのがタカタさんではありませんか。「マァー、プロフェッソール」私は余りに意外だつたものですから近付き乍ら思はず聲をかけました。タカタさんは私の方をふりむきながら「ヤアあなたです、今ね一寸發音の稽古してゐるところです。吾々にはどうもこのRの發音が鬼門でしてね、ウラーセ、ウーゼ、ウライヒヒ、ウندوقもウマクいかん」と言ひ／＼切株から勢ひよく立ち上ると、いきなりウル、とまるで含嗽でもする様な恰好で奇聲を出されるのです。私はつひ／＼我慢しきれなくなつてふき出してしまひました。タカタさん御自身もやはり可笑しかつたのでせう。たう／＼一緒になつて笑ひこけておしまひになりましたの。

こんなやうなことがあつてからの私たち二人はズン／＼親しさを加へて行くのでした。斯うしてタカタさんを加へたその頃の私達の家庭がどんなに明るいものであつたか御想像にお委かせしませう。

そして——あの何となく人の心をかじかませずにはおかない永い／＼南獨逸の冬が終ると、萬象は一齊に萌えるやうな緑一色につゝまれて夢りました。私



達はこの春の訪れとともにタカタさんの案内役を勤めながら、よくアチコチの旅へ出かけ始めました。

シュトラスブルク——佛蘭西流に發音するとストラスブールですわね、御存じの通りあそこはアルザスの首府で普佛戦争頃から佛領になつたり獨領になつたり、中々面倒な所です。現在では第一次大戦後又佛領となつてをります。このシュトラスブルクは私達のもと住んでゐたケエルからラインの河一つ越した對岸にあつて、私たちには第二の故郷とも言つていい程の懐しい町なのです。フライブルクからでも僅か四〇哩位しきや離れてゐませんので越して行つた後でもよく日歸りで遊びに行くところでした。

ヨシミ——ええ、もうその頃にはタカタさんをみんな唯ヨシミとだけ呼んでゐました。このはうが私たちにはもつと親しみを感ぜさせる言葉ですから今からさう呼ばせて下さいませ——もこの國境の街がとても好きだつたのです。

「ヨシミ、シュトラスブルクなど別に普通の人には何の取得もない町みたい

に思へますけど、どうして遠い／＼日本からいらしたあなたにあそこが興味ある

のでせうね」私は何かの折りにさう聴いてみました。すると、ヨシミは「ホ

ラ知つてゐるでせう？、ドオテの、月曜のコント、あの中に、最後の授業、つて

のがあるねえ、僕は日本であれを讀んだとき思はず臉がジーンと熱くなつたも

のです。そして、いつか歐洲に行く機會でもあつたら是非ともあそこを訪ねて

みたいものだ——まあそれが僕長年の念願でもあつた譯と答へてくれま

した。え、最後の授業ですか？、まだお讀みぢやありませんでしたか。では、か



いつまんで話の筋だけ申し上げませう。

普佛戦争の結果、アルザスがいよいよ明日から獨領になると言ふ日の、その或る小學校での話なんです。明日から新しい先一が来て獨逸語を教へるので、これが最後のフランス語の授業だといふ日。邊刻したフランツがびく／＼もので教室へ入って行くと、いつもはこはいアルメ先生がけふにかぎって少しも叱らない。そして、フランス語が世界でいちばん美しい、いちばん明晰な、いちばん堅固な言葉だと言ふことを諄々と説き、「たとへ國民が奴隸とせられても、その言葉さへしつかり握つてゐれば、その牢屋の鍵をもつてゐるやうなものだから、決してこの言葉を忘れてはならない。」と教へる。おひるになる。プロイセンの軍隊のラッパが聞えてくる。先生は改めて「皆さん」と口をきるが、感きはまつてそのさを言ふことが出来ない。そこで黒板の方へふりむいて、大きく「フランス萬歳」と書く。大體この様な筋ですがこの「最後の授業」は當時のフランス人には涙なしには讀めなかつた物語なのです。

「でも」と私達は頰をふくらませてヨシミの佛蘭西びいきに抗議を申込みました。「そりやフランス側から見ればさうでせうけれど、獨逸側から見ればその反對のことが言へますわ。何故つて、フランス語が世界でいちばん立派な言葉か知れませんけど、獨逸語だつて多色グントなそして音楽的な言葉ですわ。だからアルザスの人達がフランス語を習へなくなつたつて決して不幸ぢやないことよ。それに獨逸の學生コメルス歌にこんなのがあるんですもの。

おゝ、シエトラスブルク、美しい町よ、お前の門をドイツのラインが流れ



る限り、お前が失はれ、忘れられることなど、決してあり得ない。ラインはドイツの國土を通つて遠く流れ行き、その兩岸の間に白銀の帶を織りなす。この帶は切れることなく、それは心の帶だ。お、エルザスよ、懐しのエルザスよ。お前はわたしのハイマールラント（故郷）だ。

この歌はエルザスが佛領のときに出来た歌でせうか？ それからしてもエルザスは獨逸領でなけりやならない筈よ。など、いつもたあい口喧嘩をしなぐらもみんなこのシユトラスブルクの町が大好きであの長い／＼ラインの架橋を渡つては、いぐどエルザスの岸邊、パウル・ラアバントのほとりを逍遙したことです。あら／＼パウル・ラアバントなど、叫んぢやいけないでしたわね、ヨシミに言はせるとこの岸邊は、ルジエ・ドリル河岸——つまりフランスの有名な國歌ラ・マルセイエーズがこの町で作られたと言ふのでその作者の名にあやかつてつけられてゐるのです——と呼ばなければいけないのださうでございます。それから秋のラインを遡り國際湖ボーデン、ウルム、スツットガルト、森の都ハイデルベルクそしてシラーとゲーテの町フランクフルトへの想ひ出の旅、あるひは又奇しき魔が唄歌ふローレライの巖頭に立つて、淋しく暮れ行くラインの流れ、夕陽に山々紅く映ゆる、麗しの乙女の巖に立ちて、黄金の櫛取り髪忍びの乱れを……と皆んなして聲はり上げて歌つたあの旅の一日——思へば本當にあの頃の私は幸福そのものでした。

でも——幸福な、余りに幸福な私の生活にいつの間にか、影が寄つて來つた。つあらうとは、私は夢にも知らなかつたのでした。

(續)



清水次郎長外傳

## エベレットの佐渡甚三郎

芳川積三

恰度其頃、俗に言ふ瀬戸内アラスカ、  
ジユノウ附近にダ格拉斯金礦、アリユシヤ  
ン群島を越えて北極に近いノーム附近  
に、クロンダイキ砂金礦が相次いで發  
見せられた爲め、シヤトルは金礦探し  
に出掛ける有象無象の基地となつて、  
ごつた返しの賑はひを呈し、それに附  
き物の癡狂な不良、所謂ギヤングなる  
もの多数入り込んだのは言ふ迄もない。  
當時シヤトルの日本人中心地は南ワ  
シントン、メイン、ジャクソン、スト  
リート、の四、五、六、七街邊りであつ  
た。それに隣り合つてキング、ウエラ

一、デヤボン、ストリートの五、六、  
七街の私娼窟、賭博場、酒場等々が櫛  
比して居つた。

遠く望む高峯レイニーヤの白衣も薄  
らいで来る陽春四月頃は、待期して居  
つたアラスカ行が蠢動し初め、シヤト  
ルは彌が上にも賑はひを呈した。その  
季節になると、朝早くから撞球場、酒  
場、レストラン、ホテルの待合場、  
床屋、それに町の四ツ角に大勢の暇人  
が集つて、何時もの通り、昨夜の博奕  
や喧嘩の話に花が咲く……。

ある町角で四五人の遊人風の日本人  
が、何かがや／＼話して居る。

「おい、昨夜凄いのがあつたが知つてるか」  
「今朝そんな話を一寸耳に挟んだが、  
イタ公か、デゴか」

「それがさ、あの知つてゐるだらう。有



名な暴れ者のイタ公で通稱、狼のジョンを向ふに廻して、日本人がやったのだ。」

「へえ、狼を相手に……そりや誰だ。」

「あの虫も殺さない様な顔をして居る佐渡だ。」

「佐渡って、あの甚三郎か。」

「うん……。」

「それなら遣り兼ねないが、相手が狼じゃー 甚も痛められたらう。」

「まあ聞け、俺あ喧嘩の原は知らないが、掴み合ひは初めから終ひ迄見て居ったが、凄かつたぞ。」

「勿體をつけずに早く話せ。」

「キングとセブンのコーナーの女郎屋な、彼處に日本人の連も別嬪が居るだらう。あれが俺に少し参つて居るのだ。」

「この野郎、話らない事を言はず早く話せ。お前の顔に女が惚れるか惚れ

ないか、鏡と相談しろ。」

「よし、そんな事を言ふなら話してやらないぞ。」

「この野郎……。」

「俺やあ、あの女の顔を日に五六遍見ないと、飯も食べられないのだ。」

「巫山戯やあがるな。」

「昨夜も女の顔を見て満足して、とん／＼と搦子段を降りて来て、表へ出やうとする途端、その前で甚と狼が何か一言二言喚いたと思つたら、狼の奴いきなり甚の顔へ電光石火ぽーんとメリケンを喰はして来た。それを正面に受けたら甚も一度でお院佛さ。ひよつと顔を交したものだから、横面から後頭部へメリケンが滑つたが、余り勢が烈しかつたものだから、甚はよろ／＼つとよろけて、どつと尻餅を搦いた。



達さず狼の奴、上から伸し掛つて来たが流石は喧嘩に慣れた甚だ。下敷になりながら間髪を入れず、狼の耳へ手をかけるや力任せに引つ張つたものだから、狼の顔が甚の顔へ引つ附くや否や、狼の目の下の出張つた頬肉へ、甚ががブリと食ひ附いた。

「あは………」

「癡狂を以て鳴る狼も、是には悲鳴を上げたが、甚は容赦なく狼の肉を噛み切つた。狼の怯む間に口を血だらけにして、ぱつと其儘逸早く何處かへ逃げて行つてしまった。」

「甚は喧嘩ア旨いね、愚圖々々して居りや、狼の乾分がやってくるからね。」

「頭星だ、狼の乾分が直ぐ四五人来たがもう其時は甚が居ないものだから、狼は顔からほと／＼落ちる血をハンカチで抑

へながら、乾分に助けられて行つたよ。」

「甚は満濃の坂專の親分の所へ、清水の次郎長さ、が連れて来たあの甚ぢやない。」

「さうだよ。だから甚の喧嘩ア次郎長は込みさ。」

其の時分、日本人の不良で幅を利かして居る者は、大抵脱船した船員であつた。だから佐渡甚三郎と横濱の坂專の部屋で見知り越しの者が多かつた。

往時日本人の海外發展は、満州、シベリヤ、支那、南洋、世界到る處余り自慢にならないが、あの可憐な狼子軍によつて開拓されたものだ。其の後から彼女等の寄生虫の様な不良が這入り込み、次に飲食店が出来て行くと云ふ様な順序であつた。當時無學な彼等が作つて口吟んだ歌を讀んで見ると、歌詞はなつて居らないが、悲壯そのもの



の感じが鼻と胸にくる。

「國を出て、此處に二十年、

波の上、行く先我身は誰の妻。

嫌ぢや、好かない南京さんは臭

い。金はあるけど毛唐さんはし

つこい。好きな日本人は金がない。

其の例に漏れず、當時シヤトルにも

随分多数の邦人娘子軍が入り込んで居

った。中に神奈川生れの小糸と云ふ縹

緋のいゝ女が居った。此の女に佐渡は

馴れんで居た。女の方も佐渡を憎から

ず思つて、商賣氣を離れてもてなした。

佐渡はよく此の女の處へ泊り込んだ。

ある年の十一月、キャスケード風の

寒風吹き捲る夜明にまだ間がある四時

頃、佐渡の泊り込んで居る小糸の室を

コツ／＼と叩く者がある。小糸は起き

出て用心深く室外を窺つて見ると、異

常な雰圍氣が感ぜられた。

「誰ですか。」

「警察の者だが、用があるから開けろ。」

と言ふ聲が聞えた。白人の聲である。

既に其の時佐渡は目が覺めて居ったが

其の聲を聞くと、手早く寢巻の上から

オバーコートを引掛け、ウインドウを

開け、窓際の電柱を支えてある針金を

傳つてスーツと下に降りたが、運悪く

小指大の尖つた鉄棒が突き出て居った。

降りる勢で尻の穴と睾丸の中間へグザ

ツと突き刺つたが幸ひ、両足が地に附

いた居ったから、直ぐ引き抜き血の流

れる傷口を抑へた儘、急いでアパート

へ歸つて醫者を呼んで手當をして貰った。

出血は止める事は出来たが、尿道へ達

した穴は彼が死ぬ迄治らなかつた。

小糸が佐渡の下へ降りた頃を見計つ



てドアを開けるや、どつと四五人の覆面したイタ公が手に／＼ピストルを持って這入つて来たが、佐渡が逃げたと知るや、凄い文句を残して立ち去つた。佐渡が日本を出る時、次郎長が訓戒として、「成る丈け敵を作るな。仲裁は時の氏神と思つて、如何なる人でも任せよ。」「弱い者虐は決してするな。」「忘れても不正と思ふ事には荷擔するな。」「引くに引かれぬ時は、正々堂々と死ぬ迄戦へ。」と言はれたが、アメリカに於ける遊人とか不良の徒なるものは、腕節の強弱や度胸がどうかのと言ふ事はない。咄嗟に一發ダーンとやればそれで事が足り、親分とか蜂の頭とかになれるのだから世話はない。だから此の道で眞に度胸があり、腕節に自信のある者は次々に殺されて仕舞つた。残

忍性があつて、疲く廻る奴が後に迄残つたのであるから、日本に於ける遊侠の徒とは凡そ其の素質が懸離れて居る。高木は風に折られ、出る杭は打たれるの例に漏れず、何時の間にか佐渡にも敵が出来た。以前からシヤトルで親分面して弱い者虐をする岡野と言ふ者が、近頃佐渡がめき／＼賣り出したのを妬み事毎に絡んでくるが、佐渡はいい加減にあしらつて相手にしないのに、業を煮やし、決闘を申し込んで来た。事が此處まで行くと引くに引かれず決闘する事になり、指定の場所シヤクソン街桃梅亭の裏の空地で、午後十時を期して決行する事になり、岡野はピストルを持って先に來て待つて居つた所へ、佐渡は備前長船の銘ある二尺三寸の白鞘の業物を腰に打ち込んで、其の



上にオバーコートを着込んで悠々とやつて来た。岡野はこれに氣後れしてか、便所へ行く風をしてこそく逃げて行つてしまつて物笑の種となつた。

潔癖性の強い佐渡には、一發の銃聲で親分とか、蜂の頭とか言はれるやうな手合には兄弟分は一人もなかつたが、凡そお門違ひの方面に共に生死を契つた盟友が二人あつた。一人は西北部否北米在留民の代表的成功者で、一時は其の富三百萬弗と言はれ、バンクーバー、タコマ、ポートランドに支店を有し、銀行まで經營したソ縣出身の福屋又次郎。今一人は、ポートランドで正順亭と言ふ料理屋を開いて相當發展した、佐渡の故郷三島の隣沼津の中山安次郎であつた。後者は早く他界したが、前者は神戸、横濱にも支店を設ける様

になつたが、第一次世界大戰後の大パニックを食つて惜しくも倒産した。佐渡とこの二人は米國へ来た當時、誰が成功しても必ず助け合はうと、血を啜りあつた仲であるのを知る人は少い。

日本が日清戰役に大勝して世界人が漸く日本人なるものを見直す様になつた恰度其の頃、シヤトルの北方三十哩にある小都會エベレットが將來發展性があるやうに思はれた。佐渡はその町のヒエウイット街と三十七街の角に大洋食店を開き、其の附近のニブラックをも併せて購入し、夜の町を支配し、「ミスター佐渡」で市長や署長も頭が上らなかつた程の勢力家となつた。彼の自宅には何時の間にかあの小糸が初々しい新妻姿を見せて居つて、よく人の世話をした。エベレットに居宅を構え



てから彼は余り切ったり殴ったり喧嘩はしなかつたが、随分暇みは利いたもんだ。ベリングハムのユニオンと邦人の喧嘩に、十数人の壯漢を引き連れて乗り込み血の雨を降らしたり、又シヤトルの遊人の喧嘩に彼が出て仲裁すれば直ぐ治つたものである。晩年は種々の事業に手を出して失敗し余り振はなかつたが、兎に角次郎長の息のかゝつた者に相應しい生涯を送つて、今から十四五年前、七十九歳を一期としてエベレットの自宅で黄泉の客となつた。

〔作者註、本稿中の人物は、概

ね偽名を用ひました。佐渡に

就いては、まだ澤山の物語があります。余り長いと興味がありませんから、此の邊で。〕



日々に評判の  
マル昭

昭和醬油醸造会社  
アリゾナ州グレンデール市

SHOWA SHOYU BREWING CO.  
RT. 2 BOX 51, GLENDALE, ARIZ.



# SHOP AT SEARS & SAVE

## IMMEDIATE SHIPMENT

セアーズ・ロビュック・アンド・カンパニー  
シヤス・ロビュック・カンパニー

イールの・ロビュック  
迅速・丁寧

セアーズ・ロビュック・アンド・カンパニー  
節約・生来・ます

# SEARS ROEBUCK & CO

LOS ANGELES, CAL.





三友製食品

大黒印  
U S

白味膏  
寶子麴  
亀甲萬

三友製食品社

羅府將油醸生食社

3500 LARIMER ST., DENVER, COLO.

蘇社社長の

寶子麴

結果百パーセント



## 編輯後記

○松原様が塩湖代表會議に御出席のお留守中じうなることかと思はれた三月號も、外川様、石丸様外皆様方の御蔭で豫定の期日に發行されさうで御座います。皆様方の御目の前に繰り揚げられる今月號が今までに比して不出來なのは、編輯のお留守役を仰せつかりました私の至らぬ所、偏にお詫申し上げます。

○門脇画伯の御麗筆に依る今月號の表紙、春に相應しい容姿を以て飾られたことを感謝致します。

○本月號は創作號と致しました爲、頁数も意外に多く、新聞様、大岡様方の玉稿は次號に割愛させて頂きました。御諒承願ひます。

○藤原一葉様より御寄附を戴きました。厚く御禮申し上げます。

○次號には新人の執筆も見られる筈、尚松原様の豊富な御土産談も加へてその名編輯振り、御期待を希ひます。

○終に本號編輯に際し、毎號原板をお書き下さいます瀧井様から特別の御配願を賜りました事を感謝致します。H.S

ポストン文藝  
第三卷  
五月號

編輯人	松原信雄
同	有田百
同	島原潮風
同	重富初枝

印刷所	ポストン印刷所
發行所	ポストン文藝協會

POSTON POETRY CLUB  
UNIT I CITY HALL  
POSTON ARIZONA



Vol. 3, no. 3  
Mar. 1945



